第 22回　2014 年 2 月 26 日
ゲスト　橘　功（読売テレビ　元プロデューサー）

テーマ　放送史に残る名物番組の軌跡を追う
　　　　「『11PM』誕生のあれこれ」

主な内容
◎なぜ、テレビ局だったのか・・・。（3P）
◎第一志望は「芸能部」、でも「教育教養部」へ（4P）
◎「教育教養部」から「音楽課」へ（6P）
◎「11PM」は教育教養部が制作していた。（6P）
◎「アベック歌合戦」と「そっくりショー」　合わせて　視聴率 101％ （7P）
◎あなたも華麗な変身をしてみませんか？「桂三枝のさかさまショー」（8P）
◎真夜中に突如誕生！おとなのナイトショー「11PM」　（9P）
◎大阪イレブンは週2回放送、「テーマ主義」　（11P）
◎スタッフは、たったの5名、しんどかった！　（12P）
◎スタート直前にどんでん返し！　藤本義一さんが司会に。（13P）
◎裏文化は大阪イレブンのこだわり、と藤本義一さん （15P）
◎異色のキャスト　祇園の芸妓、医者、記者、アラビア語の先生 （16P）
◎由美かおる　衝撃のデビュー！（17P）
◎ハモンドオルガン奏者は、「11PM」ファンだった！（18P）
◎夜の 11 時は、テストパターン、テレビを消す時間だった！（20P）
◎「11PM」は、「ドキュメンタリー」に強かった！目白押し」（20P）
　　「アメリカの若者たち」「ニューヨーク・ブロンクス潜入記」（21P）
　　「ドキュメント・ザ・チャンバラ」（22P）
　　「香港九龍城潜入記」（23P）
　　「日本人強制収容所・マンザナへの道」（23P）
◎「11PM」から芸術祭に参加、なぜ？作品は「三味線の詩」だった。（24P）
◎「日本列島三味線考」の内容。（28P）
◎「三味線の詩」第2弾！「瞽女、ロマンの旅まくら」が民放祭・優秀賞を受賞（27P）
◎スタジオセットは白と黒、歪んだ時計がシンボルマーク（31P）
◎サントリーはスポンサー？？（31P）
◎藤本義一さん、直木賞受賞！（31P）
◎「丸山ワクチン」、他メディアに先がけ、大反響！（33P）
◎「丸山ワクチン」とは何か・・？（34P）
◎アニメ「攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX.」（37P）
◎全日本有線放送大賞はイレブンがスタートだった！（37P）
◎秘湯の旅と、うさぎちゃん（38P）
◎イレブンは見せ方次第、 演出の師匠は大道芸（39P）
◎タブーに挑戦して25年 （41P）
◎ジャズ好きのタクシー運転手から思わぬところで謝意（42P）
◎テレビは 10 年経ってもなくならない（44P）

【注】「11PM」（1965、昭和 40 年～1990、平成 2 年）
　　大人のワイドショー、不毛地帯といわれた時間帯を開拓

司会　今日は「イレブン」、もう本当に「11PM」なんて言わなくてもその当時は「イレブン」と言ってましたが、「11PM」に当初から関わっておられました読売テレビ OB の橘功さんをお迎え致しました。
まあ皆さんよく毎日ご覧になったと思います。月から金までやっていまして、月・水・金が東京発、それから火・木が大阪の読売テレビ発の「11PM」でした。何となく色っぽい感じがあった記憶もあるんですけれども、中にはちょこちょこと硬派なものも含まれているという、まことに不思議な時間帯であり、番組でした。それからあの時間帯を切り開いた非常に大きなインパクトを与えた番組だったという、そんな気が致します。

橘さんは 1939(昭和 14)年の7月生まれでいらっしゃいまして、神戸市のご出身。
　1962 年 3 月に甲南大学の経済学部を卒業されて読売テレビに入社されました。制作局 25 年、それから事業局 10 年、その後株式会社パナクリエイトへ出向され、OBPの発展に貢献されました。それから(株)グリークスの顧問などを経て、2005 年には愛知万博「愛・地球博」のスペイン館でイベントプロデューサーをされています。制作、事業、それから演出畑で長くお仕事をされた方です。1970(昭和 45)年くらいかと思いますが、橘さんが結婚されたのはその頃ですね。

橘氏　結婚したのは昭和 44 年でした。

――　私は昭和 45 年に結婚しました。実は雲雀丘花屋敷の JR のもうちょっと下のほうに木造アパートがありまして、下に大家が住んでいて 2 階が棟割りになっている。そこの片方に橘さんご夫妻がいまして、我々２人はこっち側にいたんです。そこからのご縁がありまして、なおかつ、非常に個人的な話になりますが、私はその頃、新婚旅行を北海道にしていたんです。ところが、橘さんが「同じ金出すんだったら香港に行っておいで」と言われまして、まだ海外旅行が珍しい時代でしたので、急きょ行き先を変え香港へ行って、橘さんご紹介の宝石屋のおばちゃんに色々とお世話になりました。それ以来のお付き合いです。どちらかというと、トラブルがあって大家と喧嘩するという、あるときは橘さん、あるときは私が喧嘩するというそんな生活を送っておりましたのでその当時の話を先にちょっとさせていただきました。
さて、(橘さんの)実のお姉さまは大村崑さんの奥様というご関係で、色々とこの世界には深い長いお付き合いがおありです。今日はその話と、「イレブン」の話をお伺いしたいなあと思います。中には硬派な番組がどうやってできたのかという非常に興味深い話が出てきますのでよろしくお伝えください。
　インターネットというのは色々なものが今調べられます。探しておりましたら面白いものが出てきました。まず見つかったのが、「11PM」に出ておられましたあの小曽根実さん(ハモンドオルガン)。ホームドラマに出ておられましたね。この方のつぶやきが出てきました。これも面白い話です。それから在学中の話が出てきまして、これは橘さん多分ご存じないかもしれません。在学中に一度はバスケットボール部に入られたんですが、新しいことをやろうというのでアイスホッケー部を作られました。なかなか楽しい青春時代を送られたようですね。
　その頃からかなり新しいお考えだったと思われますから、テレビ局へ行こうなんて思っておられたんですか。

なぜ、テレビ局だったのか・・？

橘氏　いや、そのときは思っていなかったです。

――　どんなことをしようと思っておられたのですか。

橘氏　当初は、ドラマの演出をしたいと思っていました。
やっぱり義兄の大村崑の影響が大きいと思います。姉の結婚が決まって読売テレビに見学に行ったときのことなのです。たまたまリハーサル室でドラマのリハーサルを見学したのです。部屋に入るとテレビでしか見たことがない有名な女優さんや役者さんたちがごろごろいて、まるで別世界でした。その俳優さんたちをコマのように自由自在に動かしていたディレクターがいたのです。実にすごい仕切り方なのです。それを見て感動してしまい、うわぁ、俺の行く道はもうこれしかないと思い込んでしまったのですよねぇ。

入社してから分かったのですが、その先輩は岡崎ディレクターといって、フロマネをやらすと右に出るものがいない、といった仕切りにかけては当代一の優れ者だったんですね。
もし別の方だったら人生どうなっていたかと思うと恐いですよね。当時テレビ局は推薦システムをとっており、一般公募はしていなかった。しかも入社申込の締め切り日も過ぎていたのですが、入社試験はまだ先だったのです。どうしてもテストを受けたい。
そこで義兄の登場になるのです。

ひと肌脱いでくれと頼み込んだのです。代表と役員の方々にお会して受験の許可をいただいたのです。なんとか一塁は滑り込んでセーフになりましたが、まだ2塁３塁を廻らなければなりません。テストは難しかったですね。たまたま本塁まで戻ってこられたのですが、それも運が良かっただけなのです。受験者たちの後見人は、それはすごい人たちばっかりでしたから。中曽根さんとか田中角栄であるとか、もうビビりしっ放しでしたね。一番苦手だった英語のテストが最後まで残っていましたし・・・。ところが、その英語の試験で、運良く問題が的中したんです。

―― 何を調べられたのですか。

橘氏　それは「マスコミとテレビ」という小論文なのですが、目を通して見ると実に要を得た内容だったのです。それに賭けました。左側に英文、右側に日本語訳という、英語がにがてな者でも、日本語がにがてな者でも、理解できるという小冊子を見つけましてね。薄っぺらな、５～60ページくらいの本でした。100 回くらい、いやもっとかな、左右照らし合わせながら読み込みました。特に日本語のページは丸暗記できるまで。するとその中に出てくる内容によく似てるな、と思われる文章が三つ出題されていたのですよ。それは1行に2つ3つ位しか分かる単語がないくらいの難しい文章だったのですがね。分かる単語をつなぎ合わせて、これはきっとあの部分のことだろうと述べたら、それが大当たりだったのです。

―― それがうまくはまったわけですか。

橘氏　そう、それで本塁まで生還できたということです。読売テレビに入社出来たのは、ただただ運がよかった。それだけのことです。

―― 英語はあまりお得意ではなかったようですね。

橘氏　英語は弱かったですね。外人恐怖症になっていましたからねぇ。姉は英語が堪能だったのです。私の父親が日本毛織に行っておりまして、敗戦で元町の本社が米軍に接収された時、たまたま英語が少し出来たもんで、通訳に駆り出されたんです。それで将校やいろいろな軍人と親しくなり、個人的にもつき合うようになったのです。我が家にはいつも将校

たちが出入りしていました。ワインや肉や缶詰など持参して来るものだから大騒ぎになり、最後は必ずダンスパーティになるのです。私はいつも駆り出されてレコード係をやっていました。父は、それで感化されていったのでしょう。これからは国際的に視野を広げなくてはと思って、それで子供に英語を勉強させたのでしょう。姉をセント・メリー女学院という英学校に通わせたのです。僕はまだ小さかったので、それで姉から始めたのでしょうねえ。本来は女である姉より男である私に、そうすべきだったのでしょうがね。そうしていたら私の人生も変わっていたかも知れません。

—— 別業種に就職は内定しておられたという話ですが。

橘氏　あの当時、優秀な学生を求めて、企業は入社試験をどんどん早やめていました。大学3回生の終わり頃には、就職先が決まっていた学生はたくさんいたのじゃないかな。私も住友系の会社に入社が決まっていたのです。その時は、私もこの会社で一生頑張ろうと思っていたんですよ。早々に就職が決まって、部活のアイスホッケーに熱中していました。そんなときに読売テレビに見学に行ったのですね。運命ですよね。本当に罪なことをしました。その会社には300人中の2人に選ばれ、入社の取りやめは絶対にしない、ということで念書までいれていたのです。会社も人材確保に必死だったのでしょうね。だから大変困ったと思います。しかも、それから2～3回連絡があって念を押されてもいたから、本当に断りにくくて。それで、いろいろ訳のわからない理屈をつけて父に頭を下げ、代わりに謝りに行ってくれ、と頼みました。嫌がっていましたがね。一生に一度の人生だから、許してやってください、といったかどうかは知りませんが。当時父はニッケで宣伝部に在籍しており、仕事柄テレビ局の将来性を見抜いていたのではないでしょうか。何も語らなかったですが、この選択を、一番望んでいたのは父であったのかもしれません。

第一志望は「芸能課」、でも「教育教養課」へ

—— 憧れて、これしかないと思って入社されてからはいかがでしたか。

橘氏　入社したらすぐに研修・実習というのが3カ月くらい続きました。これは皆さんも同じだと思うのですが、まず各役員や所属長が仕事の役割など一通り説明が終わったあと、生駒山に行ったり、色々な会社に営業マンと同行したり、スタジオのパシリをやったり、楽しかったですね。それで給料もらって、これでいいのかと思っていました。その研修の最後に配属を決めるのです。リハーサル室に集められて、まず編成、制作、営業に分けられるのですが、まず、自分の希望する部署に各々並ばせるのです。ほとんどの者が希望通りの局に行けたのですね。私も希望通り制作に配属されたのですが、次の段階で芸能課ではなく教育教養課に配属されてしまったのです。どうやら間違えて教育教養課のところに並んでいたらしいのです。あとで教育教養課長の末次摂子さんに、橘ちゃん希望通りでよかったね、なんて言われましたが、もう後の祭りでした。末次さんは後に大阪府の参与を務められた方で、テレビ局に来る前は読売新聞記者として業界の三女傑と言われ、在局中もその存在感には絶大なものがありました。私の人生の恩人の一人です。

—— ご自分でも、あっと思わなかったですか。

橘氏　それは思いました。しかし、「間違えた」とは口が腐っても言えませんからね。でも、この教育教養部への配属が、結果的に私のテレビ人生を決定づけたと思っています。いまでは、配属されてよかった、と思っています。末次摂子さんという偉大な方と出会えたこと、そして私のもの作りの師となった内田美子さんと一緒に仕事か出来たこと。私がテレビマンとして活躍できたのはこの2人の先輩から受けた財産のお蔭だとおもっています。配属されたの

は丁度、「村山リウの源氏物語」が終わった時で、新しく「日本の文学」という番組が始まる直前だったのです。日本の古典文学が好き、という私の面接記録を調べていたのでしょうか、この番組のスタッフに参加することになりました。この番組の制作期間に吸収した諸々が財産となり、私のテレビ人生の原動力になったとおもっています。後に評価をいただきました私の各作品の演出法は、このスタッフであった内田美子さんから受けた影響が大きいと思っています。

—— それはどんな番組だったんですか。

橘氏　「万葉集」から近松門左衛門、井原西鶴に至るまでの代表的な文学を選んで、その各々にあった表現方法で、約2年にわたり放送したものです。竹取り物語は影絵を使って、鉢かつぎ姫はドラマにして宝塚の生徒さんに演じてもらい、平家物語は講談で、今昔物語はドラマで、といった風にその物語に一番好ましい方法を企画してゆくのです。影絵も講談もドラマもすべて自分で脚本を書き演出していくのですよ。どれもこれも初めてのことばっかりですから、それは大変でしたよ。毎日が勉強、勉強、勉強でした。企画の立て方、選び方、取材の仕方、出演者の選び方、交渉の仕方に至るまで、ほとんどの事をこの番組で教わりました。研修が終わって配属されたばかりなのに、それがのっけからディレクター席に座わらせられるのですからね。夢の中でも走りまわりっていましたネ。芸能課へ配属された同期たちは、パシリ（使い走り）からのスタートですからね。芸能部のドラマはスポンサードプロですから経験を積むまでは、まだまだお預けですよ。「大阪野郎！」とか「細うで繁盛記」など、ドラマはテレビ局の顔でしたからね。
　その点、教養部はサスプロだったから、スポンサーの圧力もないし、考査さえ守れば演出はスタッフ任せといった感じでした。視聴率もあまり気にしなかったから、内容さえ良ければ何でもありでした。なによりも恵まれたのは、いい先輩たちの存在でした。末次摂子さん以下、内田明宏さん、内田美子さん、岩佐玖美子さん、田丸信堯さん、青木弘さん、北野桂子さん、武田公輔さんの諸先輩でした。

—— かなりディレクターの裁量に任されていたんですね。

橘氏　そうですね。優秀な先輩たちに囲まれていましたからね。特に内田美子さんからは、いろいろなこと吸収しました。平素は女性らしく繊細な方なのですが、演出となると奇抜で豪快なのです。厳しいところもありましたが、みんな親切でいろいろと教えてくれました。そんな先輩たちばかりだったから自由に、“もの作り”が出来るという環境だったのかもしれませんね、教育教養課は。後にテレビドラマ界の大御所となった同期の鶴橋康夫は、まだ修行中の身分でしたから出る幕はありませんでした。アシスタントとして2、3年は修業を続けていたでしょうか。しかし彼はもともと天才でしたから、異例な抜擢をうけ素晴らしいドラマを演出しました。普通テレビ局で社の看板ドラマの演出を任されるのには、最低でも10年はかかるでしょう。テレビ業界でも珍事ですよ。そしてテレビ界の黒澤明と言われるまでに、順調に成長していったのです。
他に、同期には広田基、有川寛もいました。広田は、横山プリン、中島キャッシーを見つけ出し、新しいテレビの世界を開拓、私と正反対の世界で一時代を作りました。また有川は芸能課に配属され、お笑いの分野で才能を発揮しました。お笑い芸人の育成にも力を注ぎ、社会に貢献しました。いまや芸能文化の生き字引といわれる存在です。私は、これらの同期の人たちに大いなる刺激を受けながら、これまで頑張ってこられたのかもしれません。

教育教養部では、スタジオ作業はそれほど複雑ではありませんでした。配属当初からFM（フロアーマネージャー）やAD（アシスタントディレクター）そしてディレクターまでローテーションに組み入れられましたから、一通りの作業方法はすぐに吸収していました。ただ一人、

前のディレクターをめざして必死で勉強はしましたがね。今日、同席している広ちゃん（広田基さん）は音楽課でしたから、ドラマの収録に立ち会ったり、ニュース番組のバックグラウンドをつけたりして、終始音楽漬けだったのが、ショー番組を志していた私には凄く羨ましく思われましたね。

「11PM（１１ＰＭ）」は教育教養課（きょういくきょうようか）が制作（せいさく）していた

―― そこの部（教育教養部）にどれくらいおられたのですか。

橘氏　教育教養部がなくなって制作部に統一されるのですが･･･。それがいつ頃だったかな？統一されたのがずいぶんあとだったから･･･？

―― ･･･でも、教育教養部。僕はてっきり制作部みたいなところで作っていたのかなと思っていたのです。

橘氏　それが、どういう訳か教育教養部だったのです。
「11PM」は芸能情報もあるが、ニュースを中心とした情報を提供する番組だから、教育教養部がよろしかろうということになったのでしょうね。それに芸能部は、当時人気ドラマを制作しており、人手が足りなかったか事もあったのかもしれません。
それでスターティングスタッフに選ばれた時、好きな音楽ショーものが出来ると喜んだものです。「イレブン」が始まったのが40年の11月ですが、しばらくして、念願がかない「ショータイム」のコーナーが出来て、由美かおるというスターが誕生することになるのです。そして、原田糸子、奈美悦子と続き、人気コーナーとなっていくのです。私は“ショー作り”にばかり関わっていたため（かどうかは分かりませんが）音楽課へ引っ張られることになってしまいました。そして3年後にまた「11PM」に復帰するのですが、移動先の音楽課では「ミュージカルショー」を制作することはありませんでした。やっぱり関西ではスポンサーが付かないだろう、というのが大方の理由でした。
もともと音楽課にはヒロちゃん（広田基）の上司である岩城昇部長から再三のお誘いを受けていて、その都度逃げていたのです。その時にはいろいろな理由で、最初、嫌だと思っていた教育教養部がもう大好きになっていたのですね。お誘いを受けていれば「ショー番組」の担当になっていたのかもしれませんが、実際には出来なかったのだから。結局は音楽課にひとが足りなかったのが理由なのです。岩城さんは当時の読売テレビを支えた人気音楽番組をたくさん抱えていましたからね。トニー谷の「アベック歌合戦」もその一つでした。そして移動したら、この番組を担当することになりました。

「教育教養課」から「音楽課」へ

―― 「アベック歌合戦」って今でこそ本当に思い出しますよね。あの「あなたのお名前なんて～の」というのですね、五・七・五みたいな何とも言えないリズムでありましたけれども。面白いショーでしたよね。

橘氏　そう、一世を風靡しました。「アベック歌合戦」を知らない人は日本では外国の旅行者だけ、云われるほどでした。視聴率は常に50%を越え、長期間にわたり第1位でした。民放の番組は必ず番組内にスポットが入りますね。「アベック歌合戦」は日本毛織（ニッケ）が提供しており、ニッケは提供番組の全てにスポットを入れないのですよね。出場者へのお土産にプレゼントガールが出てきて“ニッケのサージをお土産にどうぞ”とか“ニッケの毛布をどうぞ”という形でコマーシャルに代えていたわけです。だから「ガンスモーク」という番組では、

スタッフが大変困ったということです。30分番組の中身はスポットを入れることを前提に、24〜5分位にしか作っていないでしょ。コマーシャルがないものだから、尺（長さ）が足りない。だから足りない分を埋めるためには、予告編しかないのですね。25分の中身を5分で紹介するとストーリーが解かってしまうので編集者は大変苦労したそうです。

—— 来週の話が全部分かってしまうという。

橘氏　そうそう。

—— ニッケというのは確かお父様がおられた会社ですよね。

橘氏　そうなのです。父親は日本毛織の宣伝部に在籍していました。だから学生時代からいろんな面白い話をよく聞いていましたね。球場でのナイターコンサートの最初は「ニッケ・ナイターコンサート」だったとか、テレビ番組で当時モデルだったヘレン・ヒギンスに、カメラに向けてウインクをさせたのは私だ。これがテレビでのカバーガールの最初なのだ、などとよく自慢していましたね。

—— 懐かしい名前が出てきました。ヘレン・ヒギンスを覚えていない方はいませんね。もう全員知っているというすごい世界ですけれど。であの「アベック歌合戦」と「そっくりショー」で随分もまれましたか。

「アベック歌合戦」と「そっくりショー」　合わせて　視聴率 101％

橘氏　「アベック歌合戦」「そっくりショー」は、その二本の番組の視聴率を足すと100％を越えた。片方が50％を切っても片方は50％％越える。そういうような数字が長期間、続きました。週刊誌や新聞で岩城昇プロデューサーは「100％の男」としてよく特集されていました。公開番組でしたので大阪を中心に周辺の市民会館はほとんど廻りつくしましたね。岩城さんは業界で「公開番組の基」と言われていますね。当時他局では公開番組はほとんどなかったように記憶しています。その後、「プロポーズ大作戦」「全日本歌謡選手権」とヒット作はつづきました。すべて制作は岩城さんでしたね。

【注】「アベック歌合戦」（1962、昭和 37 年〜1968、昭和 43 年）
「そっくりショー」（1964、昭和 39 年〜1969、昭和 44 年）

—— 岩城さんのどういうところが橘さんにとって勉強になったんですか？

橘氏　私はどちらかと云えばドキュメンタリー系ですので、演出面では特に勉強にはならなかったんですが、岩城さんの際立って素晴らしいところは発想力と決断力だと思いますね。番組というものは、人が絶対に考えもつかないことをやらないと意味がない、ということを学びました。そして企画した番組を成立させるためにはどうすべきか、その根回しの“うまさ”です。これは中々まねることは出来ませんね。極秘裏に動きますから。誰がどうやってもダメだろうと思うことでも、これだと思ったら役員会でもなんでも通してしまうのですから。大体普段から神出鬼没で何時どこに現れるか分からない。もう魔法使いとしか言いようがない・・このひとは。結局いまでも分かりません。
「アベック歌合戦」はもともと電通企画だったのです。電通が各局回ったが、どの局もあまり乗り気ではなかったのでしょう、それで様子を伺っていた。最後に岩城さんのところに廻ってきたのです。「これは面白い、まだ他局には知らせてないでしょうね」と即決したそうです。あとで各局、地だんだ踏んだ、とか踏まなかったとか、友人の電通マンから聞きましたね。その2年後に、「そっくりショー」が始まるのです。この番組も凄かった。

その記者会見の席上での岩城さんの挨拶がまた業界で話題になりました。「夜眠っていたら、美女が100人、私の前にそろって現われたのです。そして、全員がこっち、こっちと手招きするのです。よくよく見たらみんな美空ひばりなのです。これだあ！」プロデューサーが並みいる芸能記者さんたちの前で、こんな子供じみた発言をしますか？でも、翌日の各紙の芸能蘭には“美空ひばりが100人”の見出しが躍っていました。当然週刊誌にも波及してゆき“視聴率100%の男”の特集記事が並ぶこととなったのです。
その後も「プロポーズ作戦」や色々なヒット作を送り出し「岩城ワールド」の世界を作っていきました。読売テレビの開局前はラジオ神戸の名物プロデューサーで、元々は演奏活動をやっていて、兵庫県の三木市のある高校の音楽教師もやっていたのです。しかし、そのことに関しては、多くの事を語りませんでしたね。でも、ときどきパーティで酔っぱらったら、ピアノで、よくクラシックの名曲を演奏していましたね。私はそんな岩城さんが好きでした。

あなたも華麗な変身をしてみませんか！
桂三枝の「さかさまショー」

―― ほかにはどんな公開番組を演出なさったのですか。

橘氏　異動後、私も岩城風公開番組をいろいろと制作しましたよ。
「アベック歌合戦」「仁鶴とエラはろう！」「三枝のさかさまショー」「特訓！グリグリ名人会」・・それに、お手伝いですが「そっくりショー」「全日本歌謡選手権」・・・まだあったかな？まず「アベック歌合戦」を手直し、しました。引き継いだとき、すでにやや視聴率が下降線へ向かいつつあったのと、既存の番組をそのまま引き継いで共倒れするのも避けたかった。長く続いていたので飽きられかけていたのでしょう。それで装いを新たにして「スターと飛び出せ歌合戦」として再スタートさせました。素人だけだった出場者にスターを加え、舞台中央に作った大滑り台から次々と登場させたのです。改定前の視聴率を4～5%持ち上げ、スポンサーを継続することが出来ました。そのあと「仁鶴とエラはろう！」「桂三枝のさかさまショー」「三枝の特訓グリグリ名人会」と次々と企画してゆきました。
とくに「さかさまショー」は“あなたも華麗な変身をしてみませんか”と呼びかけ出場者を募集したのです。ビリになった者以外は全員グワム旅行の特典を付けたため、出場者にはこと欠きませんでしたね。男は女に、女は男に本格的に変装させるのです。三枝さんと寸劇をさせたあと、唄で競い合わせるのです。ただ、それだけの事なのですが視聴率はウナギ上りでした。公には女装男装なんてとんでもない時代、それに一般の海外旅行もまだまだ珍しく、完全に時代を先取りしていたのでしょうね、これこそ、まさに岩城流免許皆伝ですかねえ。三枝君も新鮮で当時は売り出しの真最中、上り龍の時でした。それにしても女装癖の男性が世の中に、こんなに多く隠れていたのかと驚きました。それにグァム旅行の獲得者が一回に6名、1クール13回ですから3カ月毎に約80名の団体旅行になるのです。責任者として一回、添乗した事があるのですが、まさに珍道中の連続でしたね。まずのっけに入管で引っかかり、責任者の私が呼ばれました。「これは何の団体ですか」と不信がられ、どう説明したらいいのか思案の結果、正直に云うことにしたのです。「さかさまショー」という読売テレビの番組がありまして・・あのう・・と口ごもっていたら、入管の方が続けて「あぁ、あの番組の出場者の方たちですか。面白い番組ですよね。いつも家族一緒に楽しんでおります。どうぞ、どうぞいい旅を・・」観ていてくれたんだ！「ありがとうございます。楽しんできま～す。」ホッとすると同時に、放送のないグァムではどう説明しようか、先が思いやられました。

―― それはよかった。それで楽しい旅ができましたか。

橘氏　3日目の夜だったか、部屋のドアーをノックするものがいたので一体誰だろうと開けてみた

ら、そこにハイビスカスを頭に飾ったピンクのムームー姿の絶世の美女が立っていたんです。わがグループの中にはこんな美女はいなかったし、グァムには知り合いもいないし･･･。
こんな時間に･･ひょっとすると夜鷹か･･？
「部屋を間違えていませんか？」
「ごめんなさい、橘さん、わたし？？です」
「えぇ～！ウソでしょう！･･＃％＆＊％･？？？･･･どうしたの、こんな時間に」
どう見ても男性には見えない。信じられない程の見事な変身ぶりなのです。そして、
「私さみしいのです。ホームシックになって･･･」
と涙声になってシクシクと泣くのです。
そんなこと云ったって、私にどうしろというのか。困り果ててしまいました。
部屋に入れる訳にはいかないし、ここで立ち話もできないし、それでバーに連れていって飲みながらしばらく話を聞いて慰めてやったら、やっと気が収まったのか自分の部屋にもどっていきました。あの時もし部屋に入れていたら果たしてどうなっていたか。いま思い出しても胸がドキドキしてきます。その翌日、バアーのボーイにこんなことを云われました。
「あんな美しい奥さんを泣かせて、YOUも罪な男だなあ！」

真夜中に突如誕生！大人のナイトショー 「11PM」

―― そんな色々な修業時代があって、その「イレブン」に結びついていく分けですね。

橘氏　そうなんです。
昭和40年の11月に「11PM」は始まりました。深夜、突然と茶の間に、気楽で洒落た都会のクラブを再現させたのでした。それは唐突な出来事だったのです。当時、夜の11時台は、テレビにとって真夜中だったのです。でも画面の中ではスタジオに大人たちが集まって気軽に楽しく洒落た会話と音楽を楽しんでいたのです。お色気もあったし、軽いジョークも交わされていました。ニュースも真剣にやり取りされていました････。世の中に対して、世間に対して、市民に対して、常識に対して、テレビに対しても、11時という時間に対しても、これは唐突な出来事だったのです。
「11PM」という番組名さえも、オシャレであった。ニュースにシャレた音楽ショー･･･。おとなのワイドショーの先駆者として現在人気のニュース・ショーの形式を、すでに備えていた画期的な番組としてスタートしたのです。また、それは、すべての常識を打ち破り、タブーに挑戦し続けた反骨の25年の始まりでもあったのです。
現在人気のトークショーやバラエティ、情報ワイドなど、ドラマ以外は、すべて「11PM」が開拓し辿ってきたノウハウを、いじくりまわしているだけなのかもしれません。それほど「11PM」がテレビ界に果たした役割は大きいものだった、と自負しています。

―― 私も、よく観ていましたよ。誕生したきっかけはどんなことから･･･？

橘氏　企んだのは日本テレビの制作の井原高忠プロデューサーと報道の後藤達彦さん。2人は同期で仲が良く、制作と報道に分かれてお互いに活動していました。それに広告代理店のビデオプロモーション社長・藤田潔さんが加わった。この3人は凄く仲が良く普段から交流を続けていたのですね。
井原高忠さんは日本のミュージカルショーの草分けといわれる「光子の窓」や当時人気絶頂のザ・ピーナッツの「ザ・ヒットパレード」などを企画制作し、飛ぶ鳥落とす勢いでした。そして次の企画には芸能でもなく、報道番組でもない生のニュースショウをやりたいと思っていたのですね。まだ日本にはそんな番組などなかった時代ですからね、随分と進んでいたのでしょうね。

そんな時、藤田さんが、まだコント作家だった前田武彦さんを連れてとアメリカへ視察に旅行に出かけたのですね。夜、ホテルに帰ってきて、部屋のテレビをつけたらジョニー・カーソンとサミー・デーヴィス Jr. が2ショットで映っていたのです。ジョニー・カーソンは、元々はコメディアンで当時は世界で一番出演料が高いキャスターと云われていた大スターです。サミー・デーヴィス Jr. は売り出し中のシンガーです。それだけでも凄いことだったのです。この番組「トゥナイトショー」はスタジオ外への取材は一切行わず、すべてをスタジオの中だけで進行してゆく番組なのです。どんな大スターであってもスタジオまで連れてくる。またスターたちも声をかけられると、喜んでやってくるのです。しかも生放送で夜。歌あり、ショウダンスあり。凄い番組だったのですよ。藤田さんは日本へ帰ってからも、こんな番組やりたいなと思っていたのですね。そんなときに井原高忠さんが、新しい番組企画を持ちかけたものだから話は一気に前へ進んでいったのです。それに後藤達彦さんも加わって企画が練り上がっていったのです。
ちょうどその頃、他局で木島則夫さんが朝を開拓してしたのですね。民放と云うのは時間を売って商売しているわけですから、24時間の売り場面積から、人が眠っている時間を少しでも削っていかなければならない。で、木島さんが朝をやったのなら、こちらは夜の時間を開拓してやろうということもあったのですよね。

—— それで、スポンサーの方は、うまくいったんですか・・・・・・・。

橘氏　営業は当初スポンサーを付けにくいと二の足を踏んでいたのですが、スタートしてみると、話題を呼び視聴率も取ったものだから、もう何も言わなくなった。逆に営業の拡販につながったものだからバックアップするようなった。日本テレビの社員のボーナスは「11PM」の収入で全部賄ったというくらい好調だったのです。そうして「11PM」がスタートしたのですが、それから25年も続くとは誰も思わなかったと思いますよ。

その秘密のひとつは、実は“PTシステム”という番組スタイルにあったのかもしれません。この種の番組は普通　スポンサードプロにしますよね、一社か2社かの。しかし「11PM」は番組を売らずに、間の時間だけを売ったのです。スポンサーが番組を提供する場合の一番条件は番組イメージですよね。イメージを壊すような内容であれば強く抗議するか番組を降りるかしますね。「11PM」はスポットを売るだけですから内容には一切口出しは出来ません。いやなら降りるだけ。でも番組人気が急上昇していたため、希望者殺到で、いくらでも代わりがあった。3カ月待ちや半年待ちはざらでした。スポットの単価は徐々に上がって行くし、売れない時間帯とのセット売りも出来るし、営業はウハウハだったでしょうね。

結果的には大当たりしたのでよかったのですが、スタート時には営業としては、もしスポットが売れなかったらどうしようという不安があった。そのリスクを避けるため電通と博報堂に生CMとして各30秒ずつ買ってもらった。電通にはサントリーを、博報堂には口腔清涼剤ラボリスをつけた。ラボリスでクチュクチュとやった生CMの安藤さんのお色気が何とも言えないと話題を集め、また「11PM」の最終会まで続けてくれたサントリーは「11PM」のスポンサーだと誰もが思っていた。得しましたよね。バーのカウンターに置いていた酒はすべてサントリーだったし、取材に行っても頼んでもいないのに、相手がそうしてくれた。酒好きのゲストも決してサントリー以外の話題を口にはしなかった。みんな勝手にそう思い込んでくれていたのでしょうね。サントリーになり代わってお礼を申し上げます、という感じでした。

大阪イレブンは週 2 回放送、「テーマ主義」

—— たしか、日本テレビが週に3回、読売テレビが2回という配分だったと思いますが・・・。
読売テレビも始めるようになったきっかけは？

橘氏　スタートは同時だったのですが、企画段階で週5回は労力的にちょっときつい、ということでしょうか。日テレからYTVに申し入れがあって、東阪話し合って5回のうち大阪が2回担当することになりました。ところが日本テレビは、東京の企画内容に合わせてやってくれと言ってきたわけですよ。YTV側はそれだったら日テレの下請けやないか、それは出来ない、自由にやらせろ、と戦々恐々となったということです。日テレは各日共通の横割りマガジンスタイルで、YTVは各曜日別の縦割りテーマスタイルでした。私はまだ若輩だったのでそのやり取りには参加できず進捗状況を知らされるだけでした。で、最終的に大阪発はYTVが自由にテーマを立てて、その中に日本テレビのレギュラーのコーナーをはめ込むということで話が付いたのです。折衷案ですね。

―― ということは当初は日テレのコーナーが入っていたのですね。火曜日も木曜日も。

橘氏　そういうことです。
日テレの企画内容は歌やダンス、釣りや麻雀など遊び中心の情報番組だったのですね。YTV側はテーマを一本押しする主義でした。テーマの中に短いとはいえ、そういったコーナーを挟み込むのは、やはり違和感がありやりにくかったです。両者の意見はなかなかうまくかみ合わなかった。
日テレが持ってきたコーナーの中に「徳川夢声のジェームズ・ボンド」とか、「プレイハウスファイブ」というショートドラマがあったのです。前者は、ジェームス・ボンドの007のストーリーを徳川夢声が講談でやるわけですね。毎回6～7分ずつ。それを既にキネコで100回位、先録りしてあるものですから、日テレとしては途中でやめる訳にはいかない。お金もかけているし、徳川さんとの契約もあるし。ショートドラマも一緒ですよね。その他にボブ・マグラスの歌とか・・もあった。結局YTV側が折れて、火曜日と木曜日に分けて入れることになったのです。もう無理やりね。

大阪イレブンはまず“総論”として、第1回のテーマは「奈良を語る」でスタート。2 回目は「京都を語る」、3 回目は「道頓堀」かな。そんな中に東京のコーナー企画をはめ込むのですよ。それでも工夫してテーマ主義は曲げずに押し通していったのです。でも、途中から、YTV発の方が、視聴率が上回るようになってきたのですね。評判よかったから日テレも文句のつけようがなくなってきたのでしょうか、1年後には日テレの方から止めてしまいましたね。

―― なるほど。今お話伺っていますと、日テレ発の「11PM」というのは割とコーナーがきっちり決まっていた感じですね。さあ、読売テレビが、自分たちが全部やろうというふうになったら、今度は1時間を全部やらなくちゃいけないってことになりますよね。その辺りは改めてどんな感じでしたか。

橘氏　そうですね、番組作りとしてはやり易くなりましたね。時間枠が広がるので内容も突っ込める。しかし素材も増やして行くから、番組時間は逆に足らないくらいでした。

―― ちょっと戻りますが、スタート時の様子をもう少し詳しく話してくださいますか。

橘氏　「11PM」のスタートは昭和40年11月8日、月曜日のNTV発でした。YTVは道頓堀の橋の上から生中継で藤本義一さんと安藤孝子さんの挨拶が第一声でした。私はフロアーマネイジャーを担当していましたが、橋の上は大混乱になり、Q出しも出来ないような状態でした。当時のヘッドホンはまだコード付きだったから踏まれて動けなかったのを覚えています。その翌日がYTVの第一回放送『奈良を語る』で、ゲストに迎えた司馬遼太郎さん、石

津謙介さん相手に藤本さんは素晴らしい司会ぶりを発揮しスタートは上々でした。OSKのダンスメンバーが素晴らしいショーを披露してくれ、ショータイムの必要性を絶対的なものと印象付けました。
その後、回を重ねるごとに番組は順調に進んで行き、藤本義一・安藤孝子コンビの司会は勿論のこと、レギュラーであった飯干晃一さん、木崎国義先生と、次々と人気者になっていきます。すこし遅れで由美かおるちゃんが登場すると、一気に盛り上がり、番組は順風満帆に進んでいきました。

スタート当時の内容を、ちょっと振り返ってみましょう。
田中佐和登場、占い師ブームを起こす。イレブン小曽根トリオの結成。秘境、穴場もの企画が始まり、問合せ電話殺到で電話局パンク。 アンナ・ルーセンがデビュー。「おなら考現学」放送、変な企画、ユーモア路線開始。 佐賀潜デビュー、法律をやさしく庶民の味方に。 「闘牛士の詩」でイレブンからレコード第１号、唄・高橋キヨシ。レコード会社の注目が始まり、藤本義一（作詞）・奥村英夫（作曲）のコンビが誕生。「水中結婚式」NBCを通じて全米に紹介。「われかく戦えり」で横山ノック独占取材 ２２．２％の新記録。破廉痴芸術祭、破廉痴運動会が話題を呼び「ハレンチ」路線と言われる。藤本義一・奥村英夫コンビ第２弾「帰り道は遠かった」がヒットし、レコード会社が殺到！以後ヒット曲を連発する。夜のレコード大賞」を設定。川端康成のノーベル賞授賞式を日本のテレビとして独占取材。関西テレビに類似番組「ナイトショー」が登場。カセム・アリ、アラビア人の扮装で登場、あれは本物か偽物か。「女流酒豪番付」恒例企画に、これを機に「イレブン学賞」「ジャン豪番付」「お笑い芸能人大賞」などなど恒例企画あいつぐ。「大学紛争」ものを手がける。次いで、「米、ソ、中戦わば」と社会路線も・・・そして、４４年９月９日、第２代目ホステス市川靖子の登場となります。

スタッフは、たったの５名、しんどかった！

―― いろいろとやっていますね。ところで、一番気になるんですが、スタッフは何人ぐらいいたんですか？

橘氏 ５名です。清川、内田、田丸、武田、そして橘です。私はまだ新米スタッフでしたから、まだメインディレクターのローテーションには入っていませんでしたから、番組を仕切るディレクターは4名ですね。わたしはショータイムを専門に準備をしていましたから本番制作は実際のところ４名で回わさなければなりません。本番は週２回ですから２週間周期で順番が回ってくることになります。これではちょっと、少なすぎますよね。私がそのローテーションに入ったのは半年後でしたから、きつかったでしょうね。

―― こんなこと聞いていいのかどうか、予算面は・・・・

橘氏 予算は非常に安かったですね。でも、年間予算でしたから。毎回、テーマによって違いますので、使い過ぎればお金のかからない企画をみんなで考えましたね。討論会なんかはよくやりました。プロデューサーがうまく調整していましたね。あまり気にせずやっていましたよ。ディレクターに気を遣わさないようにいてくれていたのでしょうね。
「１１PM」の後期になって私が全体を仕切るようになってからは、よく総集編を効果的に組み込み節約しましたね。決算期前になると必死でしたから。総集編は過去のいい部分ばかりを繋いで行く訳ですから、密度が高く面白い作品になりますよね。ゲストも少なくて済むし、お金もかからなくて、視聴率もとれる、一石二鳥ですね。

―― よく見ますよね、総集編。まさに宝石箱ですね。

橘氏　無事スタートは出来たものの半年もすると皆の体調がおかしくなってきたのです。このままだとみんな倒れてしまう。私がローテーションに入ったのはちょうどそんな時でした。
わたしは、それまでAD（アシスタントディレクター）やFD（フロアーマネージャー）をやりながら　秘密兵器として育てていた由美かおるのレッスンやショウタイムの準備を進めながら、その収録も既に始めていたのです。毎日休みも返上して深夜まで走り回っていました。これだけは好きな道なので、しんどくても文句など言えませんでしたね。先輩たちもADやFMもやっていましたし。そして取材にも出かけ、その編集や録音と、当時はすべてフィルム（F16）でしたから、いまのデジタルではなく作業は時間との追っかけっこで大変でしたね。各技術担当者と打合せをしたり、部屋押さえなど、限りがありません。私は各ディレクターの取材を代行したり、出来る限りのカバーはしましたが、みんなの体力の限界は徐々に近づいていました。

――　裏では相当きつい勤務状態だったんですね。倒れる寸前でしょう。どうなりました？

橘氏　そうですね。相当疲れていましたね。疲れると頭の回転も悪くなって仕事の効率も悪くなってきますよね。普段2時間で出来ることが3時間かかるとか効率がぐっと落ちてくる。とにかく睡眠時間は1日4時間ぐらいしかとれず、それ以外は全部仕事しているのですから。みんなもうくたくたでしたね
そんな状態のなか、私の初ディレクターが回ってきました。スタートしてから丁度半年後の昭和41年5日24日。よく覚えています。
タイトルは「嗚呼？大楠公」でした。なぜ、こんなテーマを選んだのか覚えていませんが、視聴率は、まあまあ、よかったのを覚えています。多分足利尊氏と楠正成の子孫を見つけたからでしょう。永年の宿敵だった両家を仲直りさせたのですね。この仲直りは週刊誌にも大きく取り上げられましたよ。念願のショータイムには金井克子さんとバックダンサーにフラッシャーズの皆さん。ゲストは奈良本辰也さんと鉄砲光三郎さん。光三郎さんには尊氏・正成のストーリーを自分で書下ろして、歌謡浪曲で演じてもらいました。

それのあとだったかなあ。スタッフが増えたのは。疲労状態は傍目にも分かるようになっていましたので、直訴せずとも増やしてくれました。見るに見かねて補充してくれましたよ。教育教養部はそんな雰囲気のただよう、いい集団だったのですね。3名増えて8名になりました。少しは楽になりましたが、そうなると今度は作品内容をちょっとでも高めようとするので、結局はまた忙しくなってしまいましたがね。もの作りの宿命ですかね。どんな条件下であっても出来る限り自分の作品をよくしようと頑張ってしまうのですね。

――　番組のスタイルが決まれば、次はキャスティングについて、やっぱり司会陣が番組を左右すると思いますが、まずどうしても忘れられないのが藤本義一さんですよね。どうして司会に決まったいきさつを教えていただけませんか。

スタート直前にどんでん返し！　藤本義一さんが司会に

橘氏　藤本さんは、20年間、無遅刻、無欠勤です。これは大変なことですよ。生放送ですしね。人付き合いもいいし、お酒もいけるし、本番終わりでスタッフとの食事にもよくつきあってくれました。奥さんの統紀子さんが蔭でしっかりと健康管理していたのでしょうか。

スタート前は藤本さんの名前は予定に上がっていなかったですね。
レギュラーの番組を新しく始めるときには必ずパイロット版というのを作りますよね。それを役員や営業など関係者にみせて判断を乞う。 断してこれでいこうとか、これはあかんでと

か。「11PM」もパイロット版を作りました。

東京は最初、竹村健一さんが候補の最有力だった。大阪に面白い男がいるそうだ。ピアノも弾けるし、元英文毎日の記者だったから英語も達者だから、これはいけるのではないかってね。私も当時「竹村健一のレディの英語」を担当していたので、本人からちょっと小耳にはさんでいました。決まればいいな、と思っていたのです。それで竹村さんの司会でパイロット版をつくったのですが、あの強烈なキャラクターでしょ。東京人にはあのアクの良さがまだ理解出来なかったのでしょうネ。結局は、「週刊読売」の編集長だった山崎栄佑さんに決まりました。

大阪もよく似たケースになったのです。パイロット版で司会を務めてもらったのは浅野翼さんでした。浅野セメントの御曹司で、未生流の家元の旦那さん、そして労音局長も務めた方で趣味も広くルックスもよい聡明な方でした。いち押しだったのですがね。そのパイロット版にゲストとして藤本義一さんが出演したばっかりに逆転してしまった。顔よし声よし頭よし誰が見ても魅力にあふれていい男だったですからね。浅野さんも、それに劣らずだったのですが、これは運命としか言いようがありません。当時、藤本さんは、映画の脚本の分野でも頭角を現しており、勝新太郎・田宮二郎主演の浅吉の親分でおなじみ、悪名シリーズや、駅前シリーズを手がけており、シナリオライターとしては、すでに映画、テレビの世界では引っ張りだこ状態になっていたのですね。YTVの看板ドラマの脚本も何本か書いていたのです。つまり表に出てこない裏方の仕事でので、ドラマ関係者しか知らなかったのです。芸能課の後押しで、パイロット版のゲストにちょっと出てもらうことになったのです。藤本さんの人生がこれで大きく変わることになるとは・・・ねぇ。

—— で、安藤孝子さんは・・？

橘氏　安藤さんもそのときは、まだ決まっていませんでした。そのパイロット版のどんでん返しで、急きょ、ホストが藤本さんに変わったものですから、今度はホステスをどうするかですよね。放送日も近づいていましたしね。
浅野さんの司会の相手は宝塚のOGの方だったのですけど、片方だけが残るわけにはいかないので別の相手を探さなければならないわけですよね。もう調べつくした後なので、なかなか見つかりませんでした。

当時、松本君っていう新入社員がいましてね、「11PM」の準備の手伝いをしてくれていたのです。その彼が入社時の研修実習のとき、ドラマで「祇園物語」の使い走りをやったことかあるのですね。その時、主役の三田佳子さんの京都弁の指導にきていた祇園の芸者さんで感じのいい人がいたというのです。僕らは教育教養部ですから、みんな知らなかった。で、芸能課のお墨付きをもらって、上司が京都へ会いに行ったのです。そしてその場で気に入り、即、決めてきたのです。一目惚れというやつです。当時芸者さんがテレビに司会者として出演するというようなことはなかったのですね。司会なんて私には無理だといわれたのですが、いつも通りのお客さんの対応でいいのですよ、と押し切ったのです。でも、始まると、すぐに慣れましたね。感のよさは最高でした。まさにテーブルに咲いた花一輪、初回の登場から芳香を放っておりました。初めてのテレビ出演とは思われませんでした。度胸は一流でしたね。

スタートしたら間もなく、レギュラーの出演者は、次々と話題を呼んでゆき人気者になって行きました。日赤の内科部長だった木崎国義先生、読売新聞社会部記者の飯干晃一さん。2人は藤本・安藤コンビと並んで「四者会談」と呼ばれていました。飯干さんが新聞記者、木崎さんが医者で、お孝さんが芸者、そして藤本さんが作者だったのでそう呼ぶようになっ

たのですが、この４人が当初のイレブン人気を支えてくれたのだと思います。

―― ・・・そういうことなんですか。それから読売テレビの50年史を拝見しますと、全部の回に出演されまして一回もお休みがなかったのが、藤本義一さんと、それからバーテンダーをやっておられました野村頬紹さん。この二人だけが全部の回に出演されたというのを知って、びっくりしました。ところで、大阪は「テーマ主義」ということでしたよね。今日のインタビューの内容に、「深夜の時間帯をテーマ主義で切り開いた『イレブン』」というサブタイトルを勝手に付けさせていただきましたが、ちょっとその「裏文化」についてお聞かせ下さい。

裏文化は大阪イレブンのこだわり、と藤本義一さん。

橘氏　それは、藤本さんが記者発表で言った言葉、『「11PM」は裏文化。すべてのものには「表」があって「裏」がある。「裏」を徹底的にやっていく』この一言が、あとずっと一人歩きしていったのです。当時の番組は建前論が前に出て、本音の部分がかくれていた。だけど「11PM」は本音でものを云っていく。だから、あらゆる立場の人に登場してもらった。一般の人も、作家も、政治家もアングラの世界の人たちも差別なく。例えば寺山修二も唐十郎もフーテンも出演する。そういう人たちが同じテーブルで討論して、好きな発言をする。その本音の部分が「表」に対して「裏」だったのでしょうか。公には、誰もが云えなかった、でも、云いたかった。そんな事を自由に語り合ったのです。それが新鮮さを呼んでいったのではないでしょうか。

山田洋次や黒澤明監督のつくる世界が、もし「表」とするなら、場末のストリップやトルコ風呂の世界が「裏」の世界とでもいいましょうか。人の考えや倫理観というものは、その時代の常識によって決まるものですから、何が「表」で、何が「裏」なのか、と云われれば論理的な基準などありませんが、これが「表」だと決めてしまえば、自然と「裏」が見えてくるものなのです。とすると「裏の世界」がまた「闇の世界」にみえてくるから不思議なのです。そして、ひとはそれが裏であればあるほど、闇が深ければ深いほど、魅かれてゆくものなのです。

ところで皆さんは、西村寿行、大藪春彦の名前は良くご存知だとおもいます。この場には同世代の方が多いので、この例が、一番わかりやすいと思います。
昭和55年当時どちらも、高額所得表作家部門で、1，2位を占めたハードボイルド作家でした。問答無用の暴力と性的サディズム・・・。この手のものを好まない人が読めば、まるで気が狂っているのではないかと思われるほど、ここでは人間は肉片として扱われ、ブタのように殺され、女は裸にひんむかれ、いたぶられているのです。問題は、これらの作家の本がファシズムそのものではないかということではなく、一億総中産階級を支えているサラリーマンたちが、実はかくも熱烈に殺人と拷問と婦女暴行の描写を読みふけっていたか、という現実にあったのです。思えばまた、裏文化追求の歴史は、性風俗そのものの歴史でもあったように思えてなりません。

当時、欧米と同じように日本でも「性革命」の嵐が吹き荒れていました。フリーセックスと性の解放の軸はシロウトを中心に回り始めており、この傾向はとみに加速度を増しておりました。従来の性のモラルは完全に崩壊してしまい、風俗産業の巨大化する中、「セックス」は白日のもとにさらされて行きました。そして、セックス産業の多様さぶりは世界一といわれるに至って、日本人の性は、この先、どこまで走り続けるのか、そう皆さんも心配していたことと思います。

こうした性革命の現状を当時、その都度「11PM」はつぶさに捕らえ、意識と行動の両サイドから一つの風俗として紹介し、積極的に分析してきました。いやあ！簡単にそうはいいま

したが、本音を吐けば、それは、それは、また権力からの大変な弾圧の歴史でもあったのです。「イレブン」の歴史は、また、したり顔をした常識への、“挑戦”の歴史でもあったのです。それでも、「裏」への追及は、「イレブン」が終了するまでこだわり続けたのです。それが要因で、番組が終了した、とも云えますがね。
「裏」は何時か必ず、「表」になっていきますから。その使命を全うしたと自覚した時、「11PM」はその幕を下ろしたのです。25年間も、よくぞ続いたな、と思いましたね。

異色のキャスト　祇園の芸妓、医者、記者、アラビア語の先生

―― お孝さんと木崎さんのトークっていうのはなんとなく大人のアレをくすぐるような、なかなか軽妙でしたね。安藤さんの芸歴っていうのが大きかったんでしょう。

橘氏　イレブンは1時間番組ですが、当時、1時間番組ってのは、あまりなかったですね。ドラマでもドキュメンタリーでも30分だった。教養番組は帯が多かったので、ほとんどが15分番組。それが常だったですね。それで企画段階で1時間と云うのが非常に重く感じたのですね。しかも生番組だったし、時間のコントロールに不安があった。それで急きょ番組の最後にクッションとして5分ぐらいのコーナーを作ろうということになった。当時、弊社で放送していた「ホームドクター」という医学番組に、面白い先生がよく出演していた、あの先生が大人の医学でもしゃべってくれないかなあ！それが木崎先生だったのです。それで木崎さんに頼んだら快く引き受けてくれたのです。そしてスウェーデンから来日したばっかりだったアンナ・ルーセンさんを話相手に起用して「大人の医学」を語り合うスタイルを考えた。ところがどっこい瓢箪から駒！そのクッション枠を穴埋めしてくれただけではなく、一番早く人気ものになり、このコーナーが長く続くことになるのです。そんなこんなで、安藤さんと木崎さん、それにアンナ・ルーセンさんが当初の「イレブン」を盛り上げ支えてくれたのですね。

―― なるほど。あの飯干さんはどういうことで…まあ読売テレビだから読売新聞というのは分かるんですが。

橘氏　飯干さんは読売新聞の社会部の敏腕記者で当時「漫画読本」という文芸雑誌に大人のエッセイを連載していたのです。軽妙なタッチで“むちゃくちゃ”面白かったので、性格もそのままとちゃうか、とあってみたら全くそのままだったですね。それで、やってくれと言うたら、“よっしゃ”と2つ返事。もう即決でした。おしゃべりの面白さは絶品なので、パイロット版から出てもらったのですが、だれも文句をつけるものはいませんでしたね。当時は読売新聞の社会部の次長だったのですが、イレブン出演後、一気に著名人となって仕事の依頼が殺到しだしたのですね。両立ならずで、読売新聞を退社し、イレブンと執筆活動に専念することにしたのです。そして亡くなる間際まで「11PM」には付き合ってくれました。

「ヤクザの世界」のドキュメンタリーを書かしたら飯干さんの右に出る者はなく、アサヒ芸能に連載した「仁義なき戦い」が大当たりとなった。同名の深作欣二監督の映画も大ヒットし連作となりました。当初の「アサヒ芸能」での連載はノンフィクションスタイルだったのですが、調べ上げた手持ちのネタをすぐに使いきってしまうということで、途中から小説に切り替えたのです。そうするとノンフィクションの1回分のネタで、10回分くらいに延ばせる。おまけに迫力もより凄く表現できる。一石二鳥や、と言っていました。もともと小説の才能もあったのですよね。でも小説は書いたことがなかったので、当初はよく藤本さんに手ほどきを受けていましたね。その後、活動の場を東京に移して、ますます活躍しました。
そして木崎さんも同じような理由で日赤を辞めました。その博学ぶりを各方面から求められ活躍の場を拡げて行きました。結局、飯干さんも木崎さんも本職からはなれ、お孝さんは

祇園にすばらしい店を持ちました。みんな「イレブン」がその人の人生を変えてしまったのかなあ、と思ったりもします。

—— 結構、長かったですもんね。

橘氏　ええ。もう一人面白い人がいましてね。カセム・アリさん。長い間、誰もがアラビア人だと思っていました。実は、田中四郎さんという人で、大阪外大アラビア語科の教授だったのです。ゆくゆくは中東アジアやアフリカの国際情勢が面白くなるらしい。いま、その通りになっているのですが、その辺の裏話をいてほしいと、田中さんに企画を持ち込んだら、本人は大乗り気だったのです。しかし、きわどい話題も要求していたので、立場上まずいなあ、と云うことになってしまった。素顔が分からない方法なんて変装しかないですよね。それで、「アラビア人に化けてくれ」と切り出したら、それはいいね、面白い！とすんなり受け入れてくれて出演が成立したのです。話題になりましたね、大当たりです。たどたどしい日本語が却ってよかったのですね。日本語のうまいアラビア人やと思っていましたよ、みんな。うちの社員ですら、だまされていましたから。2年くらいかな、誰も疑わなかったですね。しかし鼻の効く一部の記者がかぎつけ、ついにバレテしまった。結局、番組を降りることになったのです。しかし田中人気は経済界でも実力を認められており、色々な会社から顧問にと引っ張りだこだった。結局、最終的には京都市立外語大学に求められ古巣に復帰されました。

—— 真っ当な道に戻られたわけですね。

橘氏　そうです。面白い人がいっぱいいるんですよ、11PMには・・。

由美かおる、衝撃的デビュー！

—— そして、いよいよ次は、由美かおるさんです。いつ登場させるか、その機を伺っていたと聞きまししたが・・・・。

橘氏　イレブンは「文化」の掘り起こしと同時に、「ひと」の発掘もありましたが、由美かおるの場合は特別でしたね。登場は衝撃的だった！自分で言うのも何なのですが、ああいうデビューの仕方は当時、他に例を見たことがなかった。一夜にして、という感じでしたからね。びっくり仰天ですよ。

「ティーチャーズペット」それが第1回目の登場でした。昭和41年2月8日。「11PM」スタートから3カ月後の事でした。私はこの瞬間を味わうために、スタートからADやFMをやりながら、また、徹夜を繰り返しながら、このショータイムの準備と収録に没頭してきたのです。たかが5分くらいの「ショータイム」だったが、新しいミュージカルを作ることに情熱を燃やし続けてきた甲斐がありました。「ティーチャーズペット」のあと、「ペピート」（3月8日）、「ガイイズア ガイ」（3月11日）もすでに収録を終えていました。放送をする度に評価はうなぎ上りで、由美ちゃんの写真が連日、新聞や週刊誌のグラビアを飾っていったのです。

放送はLIVEですが、「ショータイム」はセット転換が何度もあり、映像的な仕掛けも多く取り入れたため、VTR収録にしていました。そのため、編集には大変な労力と時間がかかりましたね。今ならボタンひと押しで繋がるものが当時は、幅6～7cmもあったテープを顕微鏡で覗きながら、走査線の間を見つけて、傷付けないように特殊なカッターで切るのです。一か所繋ぐ作業に1時間前後かかりました。また2つあった大きなスタジオの両方に満杯のセットを組み、転換に手間取ったり、NGを繰り返したりで徹夜になり、収録を終えて社を出

ると空か白んでいたというのも常でした。そして、続いて5月17日の放送分「アポロ」、7月

の「ネバー・オン・サンデー」へと続いてゆきました。

日テレの別番組では、井原さんが育てた「スタジオNo. 1 ダンサーズ」が活躍しており、それに負けないようなショーを作りたい、先輩の内田さんが西野バレイ団の西野皓三さんに相談したのです。それで、レッスン場に見に行ったら、レッスン着にひとり花を付けた目立つ子がいたのです。その子が由美かおるだったのです。それから内田さんと私が立ち会って連日の猛レッスンが始まったのです。「11PM」からスターを出すのだ。この素人くささの抜けない由美かおるをなんとかショーガールに育てあげたと思いが募っていました。内田さんとイメージ作りから歌の選局に稽古まで一緒になってやりました。西野さんも熱心だから、由美ちゃん、しょっちゅう泣いていましたね。まだ14歳ですからね。でも、みんな必死でしたから、東京なんかに負けてたまるかい！と頑張りましたね。
たかが5分のショーに徹夜までして、制作費のほとんどを使ってしまって、と叱られましたけど、結果よければすべてよしです。

「イレブン」をきっかけに、スターへの道を駆け上っていったひとは数知れないですよ。新人発掘は、ホステス、カバーガールもそうですが、ゲストも凄かったですね。由美ちゃんに続いて、初期のころには、原田糸子、杉本エマ、そして和田アキ子や千里・万里、フォーククルセイダーズ、それに"オーモーレツ！"の小川ローザ。ローザさんは、サントリーのCMでイレブンを担当していた電通の新保さんの大ヒット作でした。タモリ、あつ、さんま、笑福亭鶴瓶も出ている。今テレビで司会やってる人の大半が出ているんじゃないでしょうか。今東光、司馬遼太郎、田辺聖子、小松左京、阿部牧郎といった作家も好んで出演してくれたし、3年目にやっと出演してくれた美空ひばりさんの場合は、なんとここまでの最高視聴率、16. 3%が出ました。田中佐和の、占いブームも強烈だった。なつかしいですね、もう、半世期前の事になりますからね。

ハモンドオルガン奏者は、「11PM」ファンだった！

—— 忘れてはいけないのが、あの小曽根実さんですね。ある日、橘さんから電話がかかってきて、スタジオに遊びにおいでよと言われて行ったところが「オルガン：小曽根実」と台本に書いてあったという話、本当なんですか。

橘氏　まあまあ、そのようなことですかね。
あのね、何て言うのかな…「11PM」が始まる1年ほど前だったかな。お昼前にニュースショーの走りみたいな生番組を制作していたのです。途中に10分ほどの「吹けよ！そよ風」というホームドラマをあったのです。これも教育教養部の番組で私はフロマネをやっていました。ドラマも生だったからBGMを、生オルガンでつけていたのです。

ハモンドオルガンは音量の強弱を奏者が自由にコントロール出来るので、当時テレビ局ではよく使っていたのです。人が喋っていても、邪魔にならない静かな音色も自由にコントロール出来るのです。しかもドラマには効果音も生で付けていかなければならない。生番組でなければ音効マンがレコードなどで処理するのだけれど、生番組は何が起こるか分からないので全て状況を見て判断しながら効果的に演奏できるすごい能力が必要になってくる。その大役を小曽根さんがこなしていたのです。
小曽根実さんは、阪神電鉄や六甲ケーブルとかのほかにも六甲山の土地をほとんど所有していたという小曽根財閥のご子息なのです。そのとき、神戸に大きなマンションビルを建てたのです。その一階をスーパーマーケットにする事業を小曽根さんがはじめたのです。

それに他にも色々とビジネスやっていたから、事業家に専念したい。と、惜しまれながら辞めてしまったのです。それ以来会っていなかったのです。
「イレブン」始まったときに、どこの誰だか知らない人がオルガンを弾いていたのですよね。誰が呼んだかはあとでわかったのですが、下手ではないのですが素人なのですね。まず選曲にセンスがない、しかも、ゲストの歌手がきたときに、対応が出来ないではどうしようもない。こりゃ困ったと思っていいたのです。やっぱり凄いやつ入れて、本格的にやらないとあかん。東京から馬鹿にされるわとなって、ミーボー（小曽根実）を思いついたのです。ひょっとしたら、もうあれから日にちも経つし、事業も落ち着いているやろうからと電話したのです。そのときにもう、俺はミーボーしかいないと決めて、台本を作っていたのでしょう。（以下こんなやり取りがあった）。

橘　「実は新しい番組が出来たんだけど、出てくれへん～」
小曽根「あかん、あかん。事業忙しくなってきたから、無理や。堪忍して」
橘　「そんなこと言わんと、たのむわぁ！」
小曽根「ところで、どんな番組やねん･･」
橘　「いや、夜やねんけどな･･」
小曽根「夜！余計あかんわ。番組のタイトルだけでも聞いとこか？」
橘　「11」･･「PM」って、いう番組なんやけどな･･」
小曽根「ええ！あれ「アイアイPM」を読むんとちゃうの！」
橘　「“イ･レ･ブ･ン･ピーエム”」と読むんやがな。
小曽根「みてる観てる。アレ、おもろいなあ･･！？！」
「よっシャ明日から行くわ」

―― じゃあ見ておられたんですね。

橘氏　見ていたんですよ。
そんな番組に出たかったんだよな、と言うて来てくれたのです。
「11PM」というタイトルからしてシャレていて面白い、ということになったのです。
昭和40年でしょ。その頃、PMとかAMという言葉は、世間ではほとんど使われていなかった。今じゃ誰でも使いますがね。

―― それ以後、小曽根さんの名前は、ビッグネームになられた、まあ、これは「もし」とか「たら」の話かもしれませんけど、ひょっとすると、あの息子さんの小曽根真さん（ジャズピアニスト）も誕生していなかったかもしれないですね。

橘氏　それはないと思いますが･･･真君は4歳の時にすでに、キング･オブ･オルガンと云われていたジミースミスの「キャット」という楽曲をガンガン弾いていましたから。彼は天才ですよ。

当時「♪ダバダバ」という曲は三保敬太郎さんが作られたのですが、三保さん自身もオルガンが上手かったのです。東京に三保敬太郎、関西に小曽根実あり、といわれた関係でした。ミーボーは三保敬太郎さんに電話して、「あれはミーボー、やっといたら得やで」って言われたのかもしれませんね。それから二人は交流を深めていたからね。

―― 思い出しました。「♪ダバダバダバダバ…」ってやつですよね。

橘氏　「ダバダバ、ダバダバ･･･ダバダバダ～、ヒュウ、アーッ！ダバダ。」
「ある日の夜に、それは唐突に、正体不明で意味不明の、だが、なぜか気になる音楽が聞こえてきた」･･･バラエティー、トーク、ニュース･ショーとでも言ったらいいのでしょうか。

この番組に全くふさわしい曲だったですね。今聴いても古さなんて感じない。
この曲は名曲ですよ。どんな状態にあっても、「♪ダバダバ…」って聞こえてきたら、
「あっ、『11PM』が始まる～」ってね。
「11PM」はシャレた新しい番組だったのです。

―― そうですよね。

夜の 11 時は、テストパターン、テレビを消す時間だった！

橘氏　当時、夜の11時台は、真夜中だったのです。健全な国民の生活時間帯からは、はみ出していました。もう眠っているべき時間でした。テレビはテストパターンを流し、画面は白茶けて、音声は空しいザザーと云う音に変わってしまう‥という一日の生活の終わりの時間だと誰もが思っていたのです。だから、それまでは、視聴率は※印。※印っていうことは0.0%以下のことです。 でもホントは、みんな起きていたし、活動していたのです。そして、何か面白いことがないかと探していたのです。

そんな時に「ダバダバ、ダバダバ･･･」と聞こえてきました。
画面では大人たちがスタジオに集まって、気軽に、楽しく、洒落た会話と音楽を楽しんでいました。ナイトクラブか、カクテル・ラウンジでショーを肴にグラスを傾けていたのです。お色気もありました。軽いジョークも交わされていました。ニュースも、真面目で、真剣なやりとりもやっていました。やがて視聴率は2～3%に上がっていき、5%に届くときもありました。でも他局はまだ※印か1%以下にあえいでいました。

大阪は大阪らしい独自の文化・風俗を肩ひじ張らずに取り上げて、藤本さんがよく云う“ウラ文化”の世界を紹介してゆきました。人を掘り起こし、文化を掘り起こす。つまり、祭りの大道芸は、正面から見るだけではつまらない。ナナメやヨコや、そしてウラに廻ってみて、やっとその面白さにきづく。ストリップしょうもポルノ映画も、SMやスワッピングまで、まな板の上にのせて料理し、“視聴者の欲望”を満たしてゆきました。そして、終始一貫“すべての常識を打ち破り”“タブーに挑戦”してきました。そして東京と大阪の両イレブンがしのぎをけずり、「武家文化」と「町衆文化」というお互いの特徴もつくり上げてきました。
現在人気のある「ワイドショー」のすべての形態をすでに備えていた「11PM」のテレビ界果たした役割は大きい、と思っています。

「11PM」は、「ドキュメンタリー」に強かった！

―― ちょっと色っぽいところがありながら、というのが「イレブン」のイメージですが、なぜか社会派ドキュメンタリーも含まれるんですよね。これはやはり「テーマ主義」との関わりなんですか。ドキュメンタリーの橘さんとして、手ごたえを感じたテーマにはどんなものあったんでしょうか。

橘氏　ドキュメンタリーは私の得意とする分野ですが、「11PM」自体がドキュメンタリー番組だと思って作ってきました。11PM」に20年間かかわって、作品の中にはテーマの奥が深かすぎて答を引き出すことが出来ず、取材期間が長期にわたってしまったというものがありました。一回の放送で終えるつもりが、問題点や事件が次々と連続して、興味がどんどん膨らんでき行くのですよね。だから宿題が残る。それを解消しようと、第2弾、第3弾と続いていってしまうのです･･･。でもそういった状況で作り上げた番組は必ず話題を呼びましたね。質も良かったから評価もよかった。結局、世の中のほとんどの出来事は終結な

んてないのですものね。その時に勝手のいい結論付けをしているだけなのです。森羅万象すべてエンドレスじゃないですか。

　そんな番組で私の作品で印象に残っているのは、まず一番に思い出すのが「三味線の詩」かな。これは「瞽女・ロマンの旅まくら」へとテーマがつながってゆきましたから。海外取材では「ニューヨーク・ブロンクス潜入記」や「アメリカの若者文化」。アメリカは広いです。誰が何を云おうと、海外取材の王者です。「マンザナへの道」もそうでした。これは戦時中、日本人が強制収容された実態がテーマで、姉からの情報がきっかけでスクープ取材となりました。その他、いろいろありますが、列挙しますと、「白い粉の恐怖！香港シリーズ」香港の麻薬の実態に迫り、命がけで、悪の巣窟・九龍城（ｼﾃｨ）にも潜入しました。「ドキュメント・ザ・チャンバラ」では時代劇にみる楽しさと痛快さを。そして、「漫才でんがな、人生は」では同じネタを東西の漫才師に演じてもらい、その文化の違いを追及しました。これは民放祭の芸能部門で優秀賞をいただきました。そして、もっとも長期にわたった取材が、「丸山ワクチン」ですね。これは7年間追っかけましたが、結論は出せませんでした。でも、この番組が放送されてからは、各マスコミはじめ、日本中は丸山ワクチン一色になりましたからね。

そして、一番勉強したのは「三味線」です。知っていたようで、知らなかった。日本が世界に誇れる楽器です。取材すればするほど知らないことばかり。これは4年取材して2番組です。一番頑張ったかもしれない。１本は芸術祭に参加し、２本目は民放祭に参加しました。そして、民放祭ではドキュメンタリー部門で優秀賞をいただきました。

「11PM」はお色気番組と捉えられていますが、実は日本の芸能や文化を一番多く紹介した番組でもあるのです。芸術祭に参加した「三味線の詩」では、北の津軽三味線と南の三味線を対比しながら、日本の芸能文化の発展過程に黒潮が大きく関わったという仮説をたてて、それを立証しようとした作品です。この番組をきっかけに、高橋竹山と嘉手苅林昌と云う2人のスターが誕生しました。民放祭参加作品「瞽女・ロマンの旅まくら」は、日本であと一組となった「越後瞽女」の最後の旅を追いました。四国の金毘羅さんへの奉納演奏の旅は、瞽女さんにとって、生まれて初めての船旅で、その楽しそうなリアクションに感動したものでした。民放祭の受賞は、「漫才でんがな、人生は」に次いで、これが2回目。今度はドキュメンタリー部門での優秀賞となります。

―― 三味線の詩と丸山ワクチンについては、あとでゆっくりお聞きするとしまして、その他のドキュメンタリー番組の内容を、ひとつずつ簡単に説明していただきましょうか。それでは海外取材の王者と云うのですか、「アメリカ」からお願いしましょう。

「アメリカの若者たち」と「ニューヨーク・ブロンクス潜入記」

橘氏　では、「アメリカの若者文化」からお話しさせていただいます。
昭和40年の後半、アメリカ映画の「バニシング・ポイント」や「イージー・ライダー」が公開され、バックグラウンドに次々と流れる新しい強烈なリズムと、前向きなアメリカの若者たちの姿をみて、いま、アメリカで確実に、起こりつつある＜何か＞を期待しながら、「見る」取材ではなく、「体験する」取材として、キャンピングカーでウエストコーストから、大陸を逆に東へ横断していました。そしてカンザスシティから、さらに南部へと、＜何かを＞を求めて車を走らせていました。その時、かつて比較的、画一的だとされていたアメリカの管理社会の生活イメージが、大きく崩れ去り、そこに芽生えていた新しい若い世代の出現に、鮮明な印象を受けました。そして、昭和51年に迎えたバイセンテニアル（200年祭）を機に、アメリカの若者たちの文化は一気に花開いてゆくのです。

私は、毎年約1ヵ月間、5年間にわたり西海岸へ取材を慣行し、新しい遊びやスポーツ、ファッションからコンサートなど、アメリカの若者のありとあらゆる行動を追跡しました。1回の取材で3本分ぐらい制作しましたから、計10数回放送したわけになります。別に特集も組んだし、日本テレビも負けじと、アメリカの新鮮な音楽や風俗・ファッションを紹介しましたから、まさに日本中はアメリカに衣替えしたみたいでした。他局もそれに追随してアっという間に日本はアメリカブームでした。イレブンの先どりの精神が実った一番の実例ですね。痛快でしたネ。

そして、昭和51年、200年祭で湧き立つ、フィラデルフィアやボストンなど、アメリカ建国の歴史的な街の平和的な取材を終え、ニューヨークにもどりました。“犯罪都市の“ブロンクス”でパトカーに乗ったらどうなるか“、という好奇心が湧いてきました。
当時、ニューヨーク市だけで、少なく見積もって、1日に8つの変死体が、死体置き場に運ばれていました。45口径を突っ込まれて、脳天までぶち抜かれた死体、30個ぐらいに細切りにされた全身打撲の死体・・・。この無法地帯を24時間、命をかけて守っているのが、今、私たちが行こうといているニューヨーク市警・41分署。別名“アパッチ砦”と云いました。
“命の保障はしない”の文書にサインをし、1時間の同乗を許されました。廃墟のようなビルや銃弾跡が壁いっぱいに付いたビルを横目に見ながら、売春婦の群れや、廃墟のビルの陰に隠れて、マリファナをやっている子供たちや、身体中に入墨をいれたチンピラに、忠告を与えてゆく助手席のポリス。嬌声を挙げて、取っ組み合いをする黒人とプエリトリコ人のカップル。そのとき、遠くで拳銃を撃ちあうような音が聞こえたような気がしました。
「チャーリー・ワン、聞こえるか」センター無線の指令が沈黙を破りました。「シュア」別のパトカーと連絡を取り合っていた助手席のポリスが答える。「やった事件発生だぞ」と私たち取材班。「ちょうど、日本のお客を乗せて1時間になる。急いで署にもどってくれ」「OKキャプテン」そして41分署にもどってパトカーを降りようといたとき、無線が再びけたたましく鳴りました。「チャーリー・ワン、聞こえるか」「シュア」「日本からのお客はもう降りたかい」「ハイ、いま降りるところです」「では、たのむ。シンプソン通りで撃ち合いが始まった。ニグロとプエルト・リコ人だ。防弾チョッキは持っているか」「もちろん」チャリー・ワンは我々を振りおるすように、Uターンすると、サイレンを高らかに鳴らし、猛スピードで現場へ消えていきました。もう少し時間があれば映画並みのシーンが撮れたのに・・・。

ドキュメント・ザ・チャンバラ

「ドキュメント・ザ・チャンバラ」
この作品は、東映映画が12年ぶりの時代劇復活と銘うった「柳生一族の陰謀」を、当時の日本の政界に置き替えたパロディ仕立てのドキュメンタリーです。映画では徳川幕府で発生した兄弟による三代将軍の座を、実在した歴史上の史実を、フィクションをおりまぜながら、“権力”に生きる柳生一族の存続を賭けた壮大なドラマに仕上げたものです。
「イレブン」では、全体を通して、映画の撮影過程を追いながら、見せ場を切り取って、制作の過程や、さまざまなトリックの種明かしを見せてゆく手法で進めました。この新作を選んだのも、単なる勧善懲悪ではなく、現代ではとらえきれない、精いっぱい生きてゆく人間を描きたい、と語る深作欣二監督と意を同じくしていたからです。
番組の冒頭で、藤本義一さんが東映城を訪れ、「御開門」とみるや柳生十兵衛のいでたちに早変わり、そして随所にャンバラをはさみ込みながら、途中では、茶屋に腰をおろし「亭主！酒だ」の声で洋酒のサントリーのCMになる、といった具合で「時代劇」の痛快さと面白さを盛り上げようと努力しました。時代劇のセットの前で、藤本義一さんと田英夫さんが当時の日本の政界を一族の陰謀に重ね合わせて、えぐっていきました。
時代劇映画の主題の多くは、権力と陰謀の問題が中心になっており、いってみれば中

野学校や、秘密警察に連なる「仁義なき戦い」であり、親分衆の登場も、その時々の政治の条件を二重写しにしている、という内容でした。ちなみに映画の配役は柳生但馬守宗矩に萬谷錦之助、柳生十兵衛に千葉真一、徳川家光に松方弘樹。出雲阿国に大原麗子。そして、真田弘之が、この映画がデビューしました。

白い粉の恐怖・香港シリーズ

昭和52年の夏に5週連続（火曜日毎）で放送した"香港シリーズ"の麻薬編です。2週連続で放送しました。麻薬が我が国に入るルートは香港である事はよく知られています。香港一の無法地帯とされる九龍城（シティ）は麻薬の中心街です。私たち取材班の2ケ月前に、フランス人記者がノドをかき切られた悪の巣窟なのです。この巣窟に、日本のテレビ局として初めて潜入し、無気力な中毒患者の群れや窟跡などの取材に成功しました。また、中毒ゆえに殺人を犯した人たちを収容する大欖桶刑務所の生活も撮影できました。この刑務所は外国人の取材は一切受け入れず、私たちが初めての取材となりました。また、麻薬を運ぶ船を"ガサ入れ"する水上警察に同行しました。捜査は48時間に及び、船のエンジンまで分解する姿をつぶさに報告しました。ヘロインの麻袋を海中につるし、監視線に見つかると、ヒモを切って沈めるのが当時の手口で、取材中に20もの麻袋が押収されました。シリーズでは、続いて夜の香港とドラゴンボートフェスティバルの模様や、欧陽非非の生活や香港りー・シアターでの公演の模様など、また水上生活者に密着取材など・・を取材しました。

日本人強制収容所・マンザナへの道

橘氏　日本人強制収容所・「マンザナ」への道は遠く、連日40度を超すという炎暑の中での、それはまさに決死の"熱い"取材行でした。熱風が鋭く肌を刺してきて、そして、時おり舞いあがった砂塵が、取材班のヘリコプターに容赦なく襲いかかり機体を大きく揺さ振ります。
このカリフォルニアの荒涼たるロケ地に、ちょうど今から63年前（取材当時から37年前）の日米開戦時、着の身着のままの姿で、隔離収容された日系人たちがいました。
アメリカから見放され、日本からも手の届かない、この熱地獄といえる白熱の僻地で、彼らはどのような思いで、その日を送ったのでしょうか。

　私は、ここに、3年間収容され、その時の8ミリ・フィルムを持っている人がいる、という情報を私の実姉・大村瑤子から入手しました。姉は当時、夫・大村崑の影響で共に"ハム"（アマチュア無線）にはまっていて、世界中の人と交信し交流を深めていたのです。そして、カリフォルニア大学のタグ進藤教授との交信で、本人がそうだったことを私に伝えたのが特ダネとなったのです。私が入手したフィルムは、カラーで未公開の45分もの。現地取材を織り込んだこの作品は、戦争の痛みを新しい角度でとらえたものとして反響を呼びました。

　猛烈な砂嵐が巻き起こり、3秒と目をあけていられない。髪も顔も、身体全体がジャリジャリと音をたてていました。
ロスアンジェルスから車で、7時間、「死の谷」と呼ばれるディスバレーとシェラネバダ山脈に挟まれた砂漠のド真ん中に、目的地「マンザナ収容所」はありました。あたりは奇妙な形のサボテンが生えているだけで、ただ、ただ砂の世界でした。
記念碑がポツンと建っているだけの、その廃墟に立ってみて、私たちスタッフは、今更のようにその凄まじさに慄然としました。合衆国で最高地点のフィットニー山と海抜下にある「死の谷」に挟まれた地点にあり、とても脱走できるような場所ではありません。
私たちが訪れたこの日も、砂嵐が吹きすさぶ中、ギラギラとした太陽が、身をかくす場所も

ない頭上に照り付け、ほとんど蒸発してしまうのではないかと思われるほどでした。

ここ「マンザナ」のキャンプには約1万人の人間が住めるだけの木造小屋か設けられていました。移ってきた日系人には、アメリカの市民権を持つ2世も、もちろん含まれていました。鉄条網に囲まれ、内側にむけて、機関銃を向けられた生活が快適であったはずがありません。バラック宿舎に、粗末な食事。そんな非人間的な扱いに対しても、日系人はとにかく辛抱し、耐え抜こうとしました。そしていかなる命令に対しても、忠実に従うことによって、アメリカへの忠誠を証明しようとしたのです。「ドイツ系やイタリヤ系は、そのルーツを問題にされなかったのに、日系人だけがやられた。あれはアメリカの恥だった」と、あるアメリカの記者は、私たちのインタビューに答えていました。

この収容所で過ごした日系人を紹介します。
エステラ・石郷さん（取材当時76歳）彼女の夫・石郷重春は早川雪舟とハリウッドで活躍した俳優でありました。芝居の公演中に日米開戦を知らされ、彼もまた他の日系人と同様に送られ、エステラさんは白人でありながら周りの猛反対を振り切り、愛する夫と行動を共にしました。収容中に描き続けた彼女のスケッチの数々は胸打つものがあります。

宮武東洋さんは取材当時83才でした。
宮武さんはマンザナ収容所の中で密かにカメラを製作し、その生活を記録し続けました。写真は1万枚にも及び、当時の日系人の暗い日々の貴重な資料となっています。14歳の時に、ロスアンジェルスで貸家を経営していた父親を頼って渡米しました。21才で写真スタジオを経営していました。「鉄条網を切る少年」の写真が話題になりました。取材を終えた時にいただいたキャビネ版（約40枚）の写真は今も大切に保管しています。
タグ進藤さんは、私たちにフィルムを最良に状態で渡すため、カリフォルニア大学の編集室で夜遅くまでかかって整理してくれました。大学教授で教鞭をとる傍ら音楽家でもあり、自分のオーケストラ（ジャズのフルバンド）で演奏活動もしています。映画「さよなら」の主題歌はタグ進藤さんの作曲です

「11PM」から芸術祭に参加、なぜ？

―― まずは「三味線の詩」は、1974年の作品ですね。深夜番組で、芸術祭ドキュメンタリー部門に参加するために放送するっていうのは珍しいですね。受賞はならなかったけれども、結構、評判を呼んでいる。これが生まれたきっかけとは。

橘氏　「11PM」は世間一般にはそういう芸術祭とか、民放祭とかそういったものにトライするような番組ではないと誰しもが思っていたのです。それは勝手にそう思われていただけで、実際は「裏文化」を追及するという大テーマにそって、どの番組も制作していたのです。そういう風評をいっぺん打ち破ってやろうじゃないか。ということで、作ることになったのです。「三味線の唄」に続いて第2弾も制作するのですが、この2作品の説明を聞いていただければ、「裏文化」とは何か、が一番よく分かっていただけると思います。

あるとき、藤本さんと「日本の文化の流れ」についていろいろと話こんだことがあるのです。「日本人はどこからやってきたのか」というのも面白いのですが、諸説も多いし海外への取材も多岐に渡り過ぎるからと、スルーしました。しかし、「文化の流れ」については、黒潮が何か大きな影響をもたらしているのではないだろうか、これは日本国内の移動だけですむしな、となったのです。まず、「黒潮」と云うものがどんなものか説明しておきましょう。

黒潮というのは別名、日本海流とも呼ばれていますが、南方から、つまり、東シナ海を北上

して、トカラ海峡から太平洋に入り、日本列島の東側を北上して流れてゆく暖流なのです。そして、房総半島沖から東へ流れをかえてゆきます。そのために熱帯性の植物や魚貝類の分布の北限がのびているのは、黒潮の影響とされているのです。

また、日本の夏が蒸し暑くなるのは、黒潮の上を夏の季節風が通過してくるためで、これに反して、冬は黒潮の上を季節風が通過しないので、あまり寒さの影響を受けません。太平洋側の地域は、山脈が日本海側からの雪雲を遮断するため晴天が多くなって、寒さを緩和しているんです。一方、黒潮の分流である対馬海流は日本海側の地域に世界一の豪雪をもたらして寒さに拍車をかけています。これをまず頭にしっかりとたたき込んでおいてください。

―― そうですね。黒潮が日本列島に大きな影響を与えていそうですね。

橘氏　そこでまず、1つ目のキーポイントです。
この小さな国、日本の中で毎年このような複雑な気候の変化があるのですね。こんなに厳しい条件があるのに、日本人はどのようのように各地へ移動していったのか、動くのにはいろいろな弊害があったはずです。人が動かなければ文化も拡がっていきません。いったい日本の文化はどのようにして流れていったのでしょうか。

そして、二つ目は・・・。
青森放送のスタジオで高橋竹山さんの津軽三味線と出会ったとき、たった2分間の演奏でしたが、私はその時津軽三味線の、あの血の煮えたぎるような、はらわたにしみいる音色の中に、ジャズのインパルスのような衝撃を受け、日本の音楽のすべての源を覗き見る思いがしたのです。ついでですが、大阪イレブンは各ローカル局に持ち回りで「11PM」枠を提供して、共同制作をしていたのです。ディレクターの養成にもなるし、地方の文化の掘り起こしにもなる。希望するネット局にチャンスを与えていたのです。その時は藤本さん以下大阪イレブンのレギュラーも全員総出演することになっていました。晴れての全国ネットだし、どの局も楽しみにしてくれていたのです。その時のことでした。

そして、三つ目。
「三味線」の系譜を調べてゆくと「沖縄」と「奄美大島」の三味線（蛇皮線）との間に違いがあることが分かってきたのです。奄美の三味線には、津軽三味線の音律が僅かに入っているのに、沖縄のには、それがない。距離的なことを考えると不思議です。それが三つ目。

そして、四つ目のキーポイントは。
大阪の堺では、応仁の乱が終わって以来、勘合貿易や南蛮貿易で堺港は発展し続けます。そのため堺や大阪には沢山の商人が集まり、色々な芸能や文化が栄えてゆくんです。
出雲の阿国も「念仏踊り」、「ややこ踊り」で人気を博し、のちに「歌舞伎踊り」と改めて、京都から桑名、江戸へと公演の場を拡げていくんです。阿国が評判となると次々に生まれた遊女歌舞伎や女歌舞伎が形成されてゆき、なかでも遊女屋が経営する座の遊女歌舞伎は江戸にまで行くようになりました。容姿や技芸に優れた遊女たちが華麗な姿で舞台に登場し、見物を魅了したのが最新の楽器「三味線」だったのです。「三味線」もそうした歌舞音曲と共に和紙に水を注ぐがように、日本中に拡がっていったのではないでしょうか。

―― ・・・染みだしていった？その先が、楽しみですね。

橘氏　 この四つのキーポイントが結びついて黒潮文化説「日本列島三味線考」という仮説をたてました。企画の内容はこうです。

——　・・・なるほど。では内容をじっくりと伺いましょう。

「日本列島三味線考」の内容

橘氏　三味線がいつの時代、誰の手によってつくられ、誰の口の端から音律が伝わったかも定かではありません。それだからこそ、庶民の唯一の所産であり、心の慰めといえるのでしょう。この三味線がもつ「意義」と「伝え」を改めて現代という視点に立って探ってみたい、と思ったのです。

ひとつの土地でひとつの音律をとらえ、それを掘り下げていくのは尊いのですが、「三味線」の場合はそのような行為は偏執的なものになり、多くの場合悲劇的な英雄として、一人の芸人が取り上げられ、三味線の音も哀調一筋で処理されてしまう恐れがあります。人間の一生を全うすることは容易ではありません。だが、史書にあるように、時代を経て俯瞰的にとらえれば、そこにまた人物像がくっきりと浮かび上がってきます。そのような視点で、日本列島を俯瞰することによって「三味線考」の推理を「映像と音」とで表現したみたい、と思ったのです。

たとえば、沖縄に300年前から伝わるという蛇皮線。これをエキゾチックに捉えるのは、戯作者趣味といったものでしょう。そういうとらえ方をすれば、三味線は抒情の楽器にしかなりません。叙事の高まりを表わしません。人々が三味線（或いは蛇皮線）に自分の思想や感情を仮託した意味まで見失われがちになります。ひそかに儒教風な忠義の底を、あるいは仏教風な宿命観の底をくぐりぬけて、現代になお息づくという意味を考えなくてはなりません。

「三味線」には礼儀（祝事、祭事における）、抵抗（言語抑圧に対する）、生活（門付芸にみられる）、の三要素が考えられます。その流れが黒潮にのって、南から北へ移動し、奄美大島を分岐して、一方の流れは大阪湾の堺港にはいり、おおさか、京都を経て裏日本に伝わり、青森の津軽じょんがら節に結合したと考えられます。また、淡路島から、四国路に入り中国地方に流れて、改めて九州に伝わるという系譜が想定されます。これは民族移動の流れと同じものであるのです。その流れは単に、ものの移動で推理されるものではなく、音律によって想定される唯一の楽器だといえます。たとえば北の「津軽」に伝わる音律と、南の「奄美大島」に伝わる音律が同一のものであり、距離的に近い「沖縄」の音律が「奄美」のものと違うという点をみても明らかだといえます。九州に上陸した一部の芸人は薩摩藩の勢力範囲にある「奄美大島」までは流れて行ったと考えられますが、「沖縄」までは渡ってゆくことはありませんでした。ここで注目すべきことは、文化というものは、中央から地方へと流布してゆきますが、その逆はなかったということです。水が高い所から低い所へ一方的に流れるように、権力もまた同じなのです。沖縄で独自の発展をみせていた「三味線」（蛇皮線）も、当時の薩摩藩の権勢では、「島の文化」は登ってゆくことは出来ませんでした。「奄美」の三味線に、極北で大成した太棹の音律があって、「沖縄」にはない、のはこういった理由があったのです。

三味線が人形浄瑠璃を完成させ、歌舞音曲を完成さす源となった反面、地の底を這う血脈のように、生活に密着しながら門付芸の生活を支えた巾の広さを考えてみたい、と思い、点（音律）を確かめながら、線でつなぎ、その芸が現代のどういう人たちの、どういう主張で伝承されていくか、を解明しようと思うようになっていきました。

——　どのような方々を、取材なさったのですか。

橘氏　出演者は、テーマに合わせて「音律」を中心に選考しました。
北の「じょんがら節」には高橋竹山さんと木田林松栄さん。沖縄の三味線には嘉手苅林昌さん。そして、大阪では民謡酒場「ふるさと」で各地の三味線、大衆芸能から桜山梅夫・津多子師匠、宮川左近ショーの左近師匠の三味線の曲引きなど様々な三味線を取り上げました。

「じょんがら節」は北辺の孤絶した風土の中で、他に影響されることもなく、それ自体で立ち、存在しているように思われました。その、つねに闘い媚びることのない姿勢が不屈な魂を喚びおこし、荒廃し脆弱した現代に三味線を蘇らせたように思いました。現地の取材で「ねぷた祭り」を目の当たりにしたとき、三味線がまさに風土と人間を体現していることを、まざまざと実感しました。

また、沖縄の三味線は歴史の収奪と屈従の襞の部分だけが強調される三味線の音色に、鮮明で天にも昇るような明るさが漂い、幾多の受難を生き抜いてきた自信と逞しさを感じさせました。林昌さんの演奏から沖縄の心情が「陽」であることが三味線の旋律からはっきりと感じることが出来ました。林昌さんは、沖縄が日本への復帰前と復帰後に、黒田征太郎さんと取材を共にしたことがあり、その時に聴いた「十九の春」に強烈な印象を受け、私の閻魔帳にばっちり記録されていたのです。

忘れてならないのは、この世には風土、季節、言語の差があることです。日本列島の変化に富む四季の中で、湿度と乾燥に一番、微妙な楽器がいかに影響を受け生きのびてきたか、が見えかくれしてきました。

――　現場の様子が伝わってくるようです。

橘氏　当時、竹山さんは「弾く」三味線の代表、林松栄さんは「たたく」三味線の代表で、奏法が正反対でした。石川晶とカウント・バッファローズを中心にしたジャズのフルバンドと両者の「静」と「動」の競演は圧巻でした。また、視点の中心となった大阪角座、民謡酒場「ふるさと」の三味線の音色とその情景は、臨場感あふれた、生態そのもので、その引き出される音から、周囲のすべてのものが、いきいきと生命を噴き出すような感動がありました。三味線そのものが、生活し、充満している楽しさがあふれました。そこにいる、芸を背負い生きている弾き手の人生、バイタリティーが人の心に正面から伝わってきました。私は、宮川左近をいつもテレビで観ていたのに、生の芸に大きな衝撃を受けました。喧騒のなかでの録音はマイクの音量調整の目盛から逸脱しており、編集者から音が「ワレている」からとの指摘がありましが・・それを越えてなお迫ってくるところに芸の生命を感じ、私は躊躇せず採用を指示しました。放送では、この「音のワレ」が却って臨場感を盛り上げ、大衆芸能としての魅力、燃え、輝き、を伝えたのではないかと感じました。今日、録音技術の進歩の陰で、ますます鮮明な音が要求されるようになってきております。そのため、テレビやレコードなどが介在することによって、大衆芸能がいわれなく疎外され、心と心の交流が喪失されているのではないか？桜山梅夫、津多子や宮川左近の撥音は、そうしたことに対する抵抗のように聴こえ、私はそのとき、胸を熱くしました。
本番では、これらの素材をうまく組み合わせ、藤本さんが仮説を説いていったのでした。

放送後には、竹山、林昌のお二人が各方面からひっぱりだこになり、渋谷の「ジャンジャン」（小劇場）をかわきりに、全国ツアーへと、一気にスターダムへの道を進んで行きました。
また、「十九の春」に注目した音楽業界が次々とレコードを発売していきました。田端義夫さん、久保浩さんほか、いろんな方が出版しましたが、なかでも、田端義夫さんが歌った

「十九の春」が沖縄の哀調に一番あっていたのか、ヒットに繋がり、今でもカラオケでも愛唱されています。放送翌日に直接ご本人から電話をいただき、“この曲に全力を注ぎたい”と本当に熱心な方でした。また、この番組で取材したすべての素材とスタジオでの演奏曲から編集したアルバムが、実録版「三味線の詩」のタイトルで発売されました。いまでも大切に保存しています。後日譚でした。

―― 民放祭のドキュメンタリー部門で優秀賞を受賞した「瞽女、ロマンの旅まくら」は、この「三味線の詩」がきっかけになったのですね・・・・。

橘氏　はい。

「三味線の詩」第2弾！
「瞽女、ロマンの旅まくら」が民放祭・優秀賞を受賞

高橋竹山さんと青森放送のスタジオで出会って、あの血の煮えたぎるような腸にしみいる音色はどこからきたのか、私は、東北・津軽地方の村々を駆け巡っていました。そして、津軽三味線に、盲目の女旅芸人「瞽女」が大きく関わっていたことを知るのです。津軽三味線が完成するずっと前、津軽の唄と三味線を、越後瞽女の「口説き節」から学んだといわれているのです。津軽三味線が影響を受けた「瞽女」とは、一体どういう人たちだったのだろうか・・・。

“ここ一発、勝負！”というとき、ひとは、まず目を瞑り、大きく深呼吸して集中します。ものを考えるとき、イメージするとき、記憶をたどる時も目を閉じます。視界を閉ざすことによって、素晴らしい世界が展開してくるのを待つのです。

かつて、雪深い越後地方を中心に、三味線を抱えて、村から村へ渡り歩く盲目の女芸人の集団がありました。「瞽女」です。
瞽女の多くは、幼くして失明しました。それ故に、彼女たちは記憶の中の世界に生き、赤い花も、赤い夕焼けも、満天の星も、すべて幼い時に見た鮮明な残像として残っていました。そして、それが、あまりにもきれいで、あでやかで汚れないため、私は「瞽女」に心を惹かれていきました。
それは、彼女たちが、人間にとって一番大切な視覚と云うものを失っていて、唄と人情の中に恐ろしいほど開眼していたということであります。そして、その開眼こそ実に、人間の内なる美である、と気づいたからです。

そんな、春まだ浅い日。私は“サイトウ”と名乗るひとりの男と運命的な出会いをします。雨の役場の軒先で、ふっと出会ったその男とのしばらくの会話の聞き書きが、私の中の瞽女の存在を「不滅」のものにしようとは・・・！
そしてそれが、民放祭ドキュメンタリー部門優秀作品「瞽女・ロマンの旅まくら」へと仕上がっていったのです。
その後、”サイトウ“さんを訪ね、この方が、瞽女の漂泊を追跡し、その心象の世界を描き続けた日本でただ一人の画家「斎藤真一」であることを知って、驚きました。そして、アトリエで初めてその作品を拝見したとき、長い間捜し求めていたものに、確かに出会った感動で、心がひきしまったのを覚えています。
それは瞽女を通して、“真の人間とは何であるか”“生きるとはなんなのか”の教示でした。
そして、その時、その鮮烈な印象を、その感動をより多くの人々に訴えるためには、日本の歴史の裏面にあった瞽女といわれる盲目の旅芸人として、私は記録するしかないと思ったのです。

この「瞽女・ロマンの旅まくら」は、越後高田に残る最後のお瞽女さんの、恐らく最後であろう旅の記録と、そうした瞽女の世界に魅せられたひとりの画家が、津軽三味線の名手でありながら、瞽女を外から嗜好的にしか眺められなかった青年邦楽家の京極利則（現在、京極流家元）を連れ、その瞽女の記憶をたどって、越後の山村を旅したときの「出会い」と「感動」のドキュメンタリーとして仕上がってゆきました。

20年間「11PM」の制作にかかわって、その間、私はいろいろな人生のパターンを裏側から見つめてきました。その歴史は、また私に、私自身の人生観をも変えようとする「生」に対する、“いろは”を教えてくれました。
人には、すべて「生きる」権利かあります。義務があります。私のみた限り、社会の裏街道に生活する人にとって、その「生きざま」の現実の前には、生きるための“建前”や“常識”は一切、通用しなかったのです。この世に「生」を与えられた限り、生きなければならない、というだけだったのです。

ここに一人のストリッパーがいます。名前を“花子”さんとしておきましょう。年は40過ぎ、小太りで、しかも腹のシワも目立つ。いま、そんな花子さんが、ブラウン管の中で踊っています。と、すぐさまテレビ局の電話が鳴り始めます。
　「やめてしまえ～」
しかし、カメラはその前に、花子さんの生活を克明に追っていました。夫を交通事故で亡くし、乳飲み子を抱え、路頭に迷い、しかも一時は自殺まで追い込いこまれた花子さんの姿に、くいこんでいました。
人は生きなければいけない。花子さんはそのため、その時ストリッパーになるしか方法がなかったのです。そんなギリギリで生きている彼女の真摯な姿を画面は浮きぼりにしていました。そして、最後に彼女は踊りました。一世一代、一生懸命、踊ったのです。だれが花子さんの踊りを俗悪だと、責められましょうか。

必死で生きる人たち、「11PM」では、こういった裏街道の人たちを通して、“裏文化の世界”を紹介してきました。
私にとって「瞽女」はその集大成でもありました。

―― 「裏文化」について、よく理解しました。

橘氏　瞽女は幼くして失明した娘がほとんどでした。親方をお母さんと呼び、必ず親兄弟と分かれて養子縁組をしました。
江戸時代の初め、藩政の盲人救済の事業として始まったといわれ、全国に5つの流派がありました。私の取材した高田瞽女は、そのうち播磨派に属し、かつて十数軒の瞽女屋敷と200人近くの仲間がいたと言われています。

瞽女の一年は旅にあけ、旅にくれました。15キロの荷物を背負って、一年で4千キロ、5百余か所の村、3百件の瞽女宿をまわったといわれます。2月から大晦日まで組ごとに別れて越後の山村にある瞽女宿を訪ね続けました。瞽女宿はすべて普通の農家でした。この旅の日々に幼い娘の厳しい修行が行われていったのです。
瞽女は生涯、夫を持てなかった。光からの別離、親兄弟からの別離、それ故に出会いを求めてさまよい続けました。

斎藤真一さんと一緒に、“お春さん”という瞽女について、越後の村々を訪ねて回ったことがありました。ある村人は、その瞽女さんは美人だったといいました。ある人はザンギリ頭

でシラミがいっぱいわいていたと、またある人は仏さまのような顔立ちで、親切ですばらしい人だった、といいました。私はそのたびにそうだと思い、本当だと思い、その顔が幾重にも重なって、それがどんな姿であれ、真実だとおもっていきました。

「してみると真実とは、一体何であるのでしょうか」

人が人を見るぐらい、むなしいものはないのではなかろうかと思えてきます。すると自分自身もふくめて、ゆさぶられ移りゆく心。これがあるいは真実ではなかろうか、と思えてきたりもします。結局、私は、モンタージュせず、ありのまま村人たちのイメージを、その番組の中で、ひとつずつ伝え、視聴者に感じてもらうことにしました。
結局、瞽女さんと村人から聞いた細かいデータの一つ一つを結びつける何カ月かの繰り返しの中から、私なりの物語「瞽女・ロマンの旅まくら」が出来あがってゆきました。

私が瞽女唄に強くひかれたのは、彼女たちが盲目であるがゆえに「自然」の中に同化し、雪深い村びととの温かい人情の中に繋がって生きてきた芸人であったからであろうと思います。だからこそ、その唄が嫋々として物悲しく、時に、炎のように扇情的なのでしょう。

「葛の葉子別れ」の段。
初めて越後高田に瞽女さんを訪ねたとき、この唄を聴かせてもらいました。ときに哀感を込め、ときに怒りに震えながら唄いあげてゆく、そのあふれる気迫に圧倒され、同じく涙しました。劣等感を優越感に変える、この一瞬の逆転劇。つらい苦しい身の上を、生活を、ことごとく楽しさに変換してゆくことで、自分自身を納得させ、聴く者を救い上げてゆきます。かつて瞽女を受け入れた名もない村の衆との間にも、古くから、この美しく、悲しい相互扶助の関係が見事に成立していたのです。

深く閉ざされた娯楽のなかった地方の人々にとって瞽女の到来は、雪解けの春光のように、待ち焦がれていた喜びでもあったのです。

「だからこそ、瞽女はどこまででも出かけていったのです」

最後の瞽女さんとなった３人のうち、親方の杉本キクエ（明治３１年生まれ）さんが、昭和５８年３月に、手引きをつとめた難波コトミさんが平成９年の夏に、永眠されました。養女の杉本シズさんは６０年間住みなれた高田を離れ、北蒲黒川村の「胎内やすらぎの家」に迎えられ余生を楽しまれていたそうですが、近年亡くなられたと聞きました。

私たちは、あまりにも科学と文明に肩入れしすぎ、時の流れを急ぎすぎました。
目をつぶり、瞽女さんのことを遠く、近くに想うにつけ、「闇」に生きることの美しさ、豊かさを感知します。私は、逆に、この世に生きることの方がむしろ「闇」ではないか、と瞽女さんから教わったような気がします。

―― なるほど。むしろ村人の方が「瞽女さん」を待ち焦がれていた。深い話ですね・・・色々とお話を伺う中で、やっぱり橘さんはドキュメンタリーがすきなのですね。

スタジオセットは白と黒、歪んだ時計がシンボルマーク

―― スタジオのセットが随分シンプルで白と黒を基調にして、何だか随分お洒落だったということを言われていますよね。

橘氏　“夜のムードと大人の世界をイメージアップするため、＜黒と白＞でいきまっせ！”
美術の岩田重義さんの発案で、100坪のスタジオを黒のイメージで塗りつぶし、アドリブのカメラワークにも応じられる「ワンスタジオ、ワンセット」を打ち出した。黒はライトがあたっても、あたらなくても、黒は黒ですからね。だから、セットの見切れもない。それに色のついたライトを当てると、白い部分だけがクッキリと浮かび上がる。フィルターを変えるだけで、黄色にもなるし青にもなる。いろんな面白いことが出来る。おじゃれだし、経費もそんなにかからないし。

そして、白いホリゾントが黒になった。夜のムードを醸し出すべく、スタジオ中央のバーとニュースセットに、白黒を強調した大きなイラストと白塗りの立木をレイアウトした。無限の空間を感じさせる岩田さんの会心の作だった。また、岩田さんは、セットデザイナーにとどまらず、映像は勿論のこと、台本の表紙に至るまで考えるアートディレクターをひそかに目指していたのです。そして、国旗や社章、家に家紋があるように、シンボルマークとして「ゆがんだ時計」をデザインしたのです。番組イメージを鮮明にして、しいては社の利益にもつながる事をしたいと考えていました。

時計を歪めたのは「ゆがんだ世相」、「ゆがんだ現代の人間関係」がモチーフ。時間も守れない、自分の言動に責任も持てない、そんな憂うべき現実を訴えたのです。当時のテレビ界に、番組にシンボルマークを作るという習慣などなく、ましてや商品まで作ってしまったのはイレブンが最初じゃないでしょうか。出演者や取材協力者に配った記念品の“時計のマーク入りバック”人気がありました。一般には手に入らないですから、貰った人たちは大いに喜んでくれました。広報も各番組PRにグッズ作って配るようになると、その手法は各局へと広がってゆきましたね。いまでいう「ブランド商品」ですね。ビトンのバック手に入るが「11PM」の時計のマークがついているのが欲しい、ということですかね。アメリカ取材で、ニューヨークの街で、イレブン・バッグをぶら下げて歩いている外人を見かけたときには、感激しましたね。

―― あの「イレブン」の時計のマークっていうのは東京と大阪で使っていたんですか。

橘氏　ゆがんだ時計は大阪だけです。東京はまん丸ですよ。白黒なのは同じですが・・・。
あれは岩田さんが考えたオリジナルで、商標登録もしているのです。マーク入りのグラスや食器セットなど、いろいろな商品が市販されていましたよ。業者が作らせてほしいと、やって来るのですよ。売上の何％かを総務に収めて・・ビジネスになったのですね。今じゃそんなの当たり前のことですがね。

―― その頃としては結構新しかったですよね、そういうビジネスは。

サントリーは番組のスポンサー？？？

―― スポンサーで思い出しましたが、あの番組って全部 PT（スポット）でしたよね。

橘氏　「11PM」が長続きできたのは、PTシステムという、時間だけを売って、内容は売らないという方法ですよね。「11PM」を真似た番組が色々出てきましたけど、PTシステムではなかった。

―― 我が社（関西テレビ）もやりました。

橘氏　当時、KTVの番組がスタートする前に、栂井さんから連絡があって、吉川さんだったか奥田さんだったか、どちらか忘れましたが新番組について、長時間、話し込んだのを覚えていますね。スポンサーは確か「ニッカ」でしたね。だけどこの手の番組はスポンサードプロだと、ちょっときついですよね。お金を出すから、口も出すということで、結局、スポンサーが降りてなくなっちゃった。惜しいですね。仲がよかったので、よく一緒に食事しながら情報交換していました。いまだにお付き合いが続いています。

―― サントリーは生CMでしたよね。

橘氏　30秒の生CMだったのですが扱いはスポットなのです。番組のスタート前は、これから何が始まるのか、中身はどうなのか、まださっぱり“訳の分らん”状態の時に、スポットを売るのは、営業としては大変なことだったと思いますよ。当時、11時はテレビを消す時間ですから、ポンポンと売れる訳がない。視聴率も0%でしょう。だから、電通と博報堂に頼み込んで、お付き合いで30秒ずつ買ってもらった。電通はサントリーを、博報堂はラボリスを、生CMでスタートしたのです。“ラボリスでクチュクチュ”とやった安藤孝子さんの何とも言えないお色気が凄い評判になったのです。スタッフはみんな、当初の事情を知っていますから、両者には礼をつくして当たりました。バーのカウンターにはサントリーのお酒しか置かないし、ビアガーデンからの中継でも、他社のビールは映さない。提灯はサントリーを前に釣る。やっぱり、そういう長年のお付き合いがあって、サントリーも得をしたところもありますね。鳥井さんも、佐治さんも番組にはよく出演していただきました。サントリーが一番得をしたのは、ラボリスが降りてからも特にそうなのですが、スタジオのゲストたちも視聴者も勝手に“スポンサーはサントリーだ”と思い込んでいたことですね。一般の視聴者だけじゃなしにあらゆる人、企業も、イレブンはサントリーの一社提供だと錯覚していた。最初に無理を聞いてくれたのも凄いですが、最後まで続けてくれたのも有り難いですよね。20数年間ですから、すごいことです。

藤本義一さん、直木賞受賞！

―― 藤本義一さんが直木賞を受賞されたのは、「11PM」にまだ出演中でしたか。

橘氏　勿論、この番組中ですよ。藤本さんは、映画の脚本家でした。田宮二郎だとか、勝新太郎の有名な映画の脚本を書いておられた。シナリオライターとしてはトップクラスだったんですよ。テレビも読売テレビでは「大阪野郎」だとか「がめつい奴」とか色々なヒット作のドラマがあるんです。ただ、藤本さんが「11PM」で週に2回も出演すると、他局のひとも含めて、あるいは藤本さんに、週に2回も出ている人にシナリオを頼んでも書く暇がないだろうと勝手に思われた。シナリオの本ががたっと減ってしまった。ほかのテレビ局の人も、藤本さんって YTV の専属やろう、そう思われたのです。でもそうじゃないんです。当時、安いギャランティーで頑張ってくれたのです。もの凄い迷惑をかけたのですけど。しょうがないから書くしかないということで、小説を書き始めたんですよ。

―― ほう、その時から。

橘氏　もともと才能のある人ですから、すぐに直木賞にノミネートされました。4、5回。毎年毎年ノミネートされたのですけど、取れなかったのですよね。大方の意見が、絶対に藤本さんになっていた時でもダメだったのです。審査に強い影響力を持つ委員の一人が、お孝さんの熱烈なファンで、それが原因だという噂もありましたがね。世間が認めている人を4回も5回も

落とすのはもう絶対無理ということで、やっと「鬼の詩」で直木賞を受賞したのです。

受賞者の発表の日、藤本さんの家に関西のマスコミのほとんどが待機して連絡を待っていました。この時、読売テレビと藤本宅とはボタンひとつで連絡がつくようになっており、どこよりも早くキャッチできました。
イレブンスタッフは、みんな、もう我がことのように、うれしくてねェ！藤本さんとよく取材を一緒していた撮影部の岡田忠雄カメラマンが、どうせマスコミがいっぱい押し寄せてきて、みんな食事をする間もないだろうと、甲東園の駅前に出ていたタコ焼のおっさんと交渉して、お祝いに屋台ごと引いてかけつけたのです。そして記者たちに無料で配った。こりゃ、もう大好評でしたネ。

―― オフレコの話。その世界にはその世界の話があるんですねえ。いろんな勉強になりますね、今日は。

「丸山ワクチン」 他メディアに先がけ、 大反響！

―― 私から言うのも変だけど、さっきからの話の中で、これが出て来るかなぁと思ったんだけど、「丸山ワクチン」の話が出なかったじゃないですか。あれがもの凄く印象的でね。怖かったの、本当はね。よくあそこまでよくやったなあと思うことがあったけども。

橘氏　丸山ワクチンは5～6年追跡しました。その間3回か4回、特集したかな。

―― 何年頃ですか。

橘氏　昭和50年です。丸山ワクチンは「イレブン」で取り上げたために，一気に世に出たようなものですから、よく覚えていますよ、これだけは。

―― それまでに「丸山ワクチン」の事はよく知っていたんですか。

橘氏　いえ、全く知りませんでした。
昭和50年のいつだったか、私は編集室で次回11PM の素材を整理していました。そこへ父の主治医から「いますぐこちらへ来れないか」と連絡が入ったのです。その主治医は当時、中津の済世会病院の副院長をしていたのですが、普段は六甲の自宅の離れを診療所として使ってもらっていたという関係で家族付き合いしてたものだから、何があったのかも聞かないままへ病院へ行ったんです。住まいが近所で、帰る方向も同じだからよく一緒に飲んで寄り道して帰ったりしておりましたので、今回もそんなお誘いかな、位にしか思っていなかたんです。だから、そんな一大事になるとは思っていなかったのですよ。そこで、父の余命があと3カ月だと知らされわけですから、びっくり仰天ですよね。もう真っ青でした。末期の急性白血病でした。

「いまのところ完治させる方法は見つかりません。でも延命の選択肢はいくつかあります。その方法は橘君が決めてください。決まれば、それで最善の努力をするよ」「だけど、もう時間がないのだよね。君はジャーナリストだから、どうせすぐに調べるでしょう。指示をして下さい。」といくつかの治療法を列挙してくれたのです。その最後に「いま皮膚学会で私の友人が研究発表して話題になっている丸山ワクチンというのがあるのだよね。私はひょっとすると白血病に効果があるかもしれないと思っている･･･」と。

早速、調べてみました。でも、どの治療法もリスクの高いものばかりでした。唯一副作用がなかったのが丸山ワクチンだったのです。人生の終盤に苦しみを伴う治療は絶対に避けたい。詳しく調査しました結果、丸山ワクチンに賭けてみることにしました。当時、がんの宣告は死の宣告と同じと捉えられ、本人に知らせないのが通常でした。患者が生きる希望を失うからです。「がん」ではないよ、と父をだまし続けるのには、ワクチン療法は最適な方法ではないかと思ったんです。少なくとも数年間、父は、自分が「がん」であると知るまでは、ワクチンを健康薬だと思って注射を受け入れていました。

—— それでお父さんの経過は・・・？

ワクチン投与がはじまって3カ月経過しましたが、父の状態には異変はありませんでした。むしろ肌つやが良くなったと感じました。これは大変なことですよね。あと3カ月の命と言われたのが、逆によくなっているのですから。１年経ったら鼻血を出すこともだんだんと減り、２年目にはそれもなくなりました。母と一緒によく出かけるようになり、海外旅行が趣味だったのでそれも叶うようになりました。でも、ワクチンは隔日にAとB液を交互に注射をしなければなりません。国内ならまだしも海外旅行中はどうすればいいのか。困りました。父には健康薬と伝えていたので、本人は１週間や10日位は注射は休んでもいいだろう、といいます。そりゃあ、体調も良くなっていたので誰だってそう云いますよね。でもワクチンは間を開けると効果が出ないんです。結局姉の提案でハム（通信）仲間が解決してくれることになるんですが、ハム仲間の絆ってすごいですよね。ただハムで世界に向けて仲間に呼び掛けるだけなのに。しかも見ず知らずの看護婦さんが次々と無償で名乗りを上げてくれるのですねぇ。そして旅行先のホテルまでわざわざ注射に打ちに飛んで来てくれるのです。その仲間意識の強さには本当に恐れ入りました。信じられないくらいです。母は持参した日程分のワクチンを指示通された通り看護婦さんに渡すだけ。本当に感謝です。旅行はそのあと2回か3回か出かけたかな。でも毎回そんなことしていても大変だからその後、父に現状を正直に打ち明け自覚してもらったのです。結果的にはお互い気が楽になって思いやりも増し、そのほうがよかったと今でも思っています。隠し事は良い結果を生まないと思います。その後、父は7年間延命し幸せな生活を送りました。

「丸山ワクチン」とは何か・・？

—— ところで、「丸山ワクチン」について簡単に説明してくれますか。

橘氏　ワクチンの発見者は丸山千里さんといいまして、当時日本医大ワクチン療法研究施設の所長をしておりました。「結核患者にガンが少ない」ということがヒントになって、その結核菌から抽出した物質を主成分として作り出した注射液なのです。丸山ワクチンには2種のアンプルがあって、そのAアンプルとBアンプルを１日おきに交互に注射するのです

この効果をめぐっては、学者の間でいろいろな評価がありましたが、発見当初に理解を示してくれたゼリア新薬工業の伊部社長に製造を依頼して、すでに患者に使い始めていました。そして10数年が経過した昭和51年の11月27日に、その製造権を持っているゼリア新薬工業から中央薬事審議会に製造承認の申請を行なったのですが「臨床データが不十分」ということで、ストップしたままになっていました。その申請の1年前の50年の暮れに、あとでそのきっかけは説明しますが、わたしは偶然にも丸山ワクチンの存在を知ることのなり取材がはじまったのです。

その後、「わが身で試した」と東大法学部の篠崎一氏が認知を厚生大臣に直訴したり、また自民党の議員たちが中心になった「丸山ワクチンを知る会」を結成して早期認可を働き

かけたりしています。これらも取材しております。
したがって、丸山ワクチンは市販されてなく、希望する人は日本医科大学付属病院に主治医の許可をもらって、指導料5千円を納めて40日分の注射液を受け取ることになっていました。今でも指導料は9千円になりましたがその状態が続いています。

―― で、お父さんの病気がきっかけとなって、取材が始まった、ということですね。

橘氏　そうです。
丸山ワクチンの取材を開始したのは、父へのワクチン投与から3カ月後でした。投与から2ケ月目辺りから体調が日に日に良くなって来るのが感じられるようになってくると、この治療法を多くの人に知らせなければと思うようになりました。ジャーナリストとしては避けて通る事は出来ない選択でした。
無知だった「がん」についての猛勉強がはじまりました。まず資料集めから始め、丸山ワクチンの周辺を徹底的に調べ上げました。ところが肝心の丸山先生が取材をしぶってOKをしてくれません。裏切られた取材経験が何度もあったらしくマスコミを信用していなかったのですね。
どうしたら取材を受けてもらえるだろうか。私は父の治療の進捗状況に対しての方針や効果などをくまなく正直に報告することからはじめ、ワクチン信頼への強い思いを真摯に訴え続けるしか方法はないと思いました。申し込んでから約1ヵ月が過ぎたでしょうか、わざわざ先生の方から歩み寄ってくれ取材の許可をいただくことができました。

それから、取材に1年。中央薬事審議会に製造申請した2カ月後の昭和52年1月25日に「今、話題の丸山ワクチンをみる」と題して放送することが出来ました。丸山ワクチンの全貌がテレビを通じて初めてしらされた記念すべき日になりました。
番組は大反響で、放送途中からYTV本社には問合せの電話が鳴りっぱなし、大阪北区の回線が一部混乱状態に陥るほどになりました。東京でも東京医科大附属病院の電話回線がパンクし救急医療室から支障をきたしたとワクチン医療関係者は大目玉をくらったようです。その後も問い合せはとぎれず、数日後には日本医大の電話回線は増設されワクチン療法研究施設の電話は別回線となっていました。1か月内は各新聞から週刊誌はもう、丸山ワクチン、丸山ワクチン一辺倒になったくらい話題になりました。
「11PM」の丸山ワクチンの特集は今回の放送だけには止めず患者のその後を取材し続けました。興味本位で取り上げたのではないということを示すためにも、取り上げた患者さんを以後5年間は追いかけましたね。みんな快方に向かっていましたよ。
そして2回目を同年の9月20日に「丸山ワクチン追跡リポート」と題して。3回目は3年後、4回目は5年後と丸山ワクチンのあらゆる状況を徹底的に分析し報告し続けました。余命いくばくもなかった末期患者4名の方々の内3名の方は元気な姿で日常生活を送られていました。

この2回目の放送台本の最初の頁に、私は取材の感想をのべております。

『日本の医学界というところは、まことに不可思議な社会で、どんなにすばらしい臨床効果があがっても、理論的裏付けがないかぎり、その薬や治療の医学的な価値を認めようとしない。「丸山ワクチンもそうであった」 がん制圧に比類のない成績を上げながら、いまだに薬として正式に公認されず、賛否の声が交錯している。厚生省に薬事申請をしてから、はや10ヶ月がたったが、その結果はまだ報告されていない。
「がんです・・・・・」もし私たちがこう宣告されたら・・・生命の危機に直面したことがないひとにはその苦労は分かるまい。海をこえて、アメリカから、カナダから、そしてギリシャから、福音を求めて日本までやってくることを。いま、丸山ワクチンに門前市をなす人の群れをみ

る時、そんな気がしてならない。日本中や、いや世界中で多くの人たちがその日の来るのを、一日千秋の思いで待っている。医学を歴史的にみる時、事実が先に会って、あとで体系化されたという例がしばしばあった。医学の進歩は理論の進歩だけだといいきれるだろうか。すでに数万人が用い、しかもそれにすがろうとする患者があとを絶たない現在、その有効性の冷静で厳密な判断が一刻も早く出ることを期待している(橘)』と。

実は僕も今、丸山ワクチンを免疫療法として使っています。凄く良いのではないかと思っています。7年前に前立腺ガンを宣告されまして、もうサードステージだったので、余命5年といわれました。ホルモン療法も併用していますが、この通り元気です。未だに、"あんなもん、水みたいなもんや"とか言う医者もいますが、以来沢山の方が使っていますから、もう認知されているも同然ですよね。当時、医学界のほとんどの医者は否定的でした。医師会の会長をしていた阪大の山村さんが丸山ワクチンのことを水みたいなもんや、と言っていたので、この人に逆らったら医学会で生きていけなかったのでしょう。しかも山村さんはBCGから取り出したワクチンを研究しており医学会のドンと言われ絶対的な権力を持っていましたからね。結局 BCG ワクチンは副作用がきつくて自然消滅しました。なぜ、丸山ワクチンは水みたいなのかという理由も聞きたいし、BCGワクチンについても知りたかったのですがテレビには絶対に出てこなかったです。2回目の特集の取材のときにNHKと一緒だったんですが、丸山ワクチン肯定論のはずが、放送では否定論に変わっていました。これも圧力があったのでしょうかね。分かりませんがね。面白い事に否定論の放送後に関連会社の株価が下がり、肯定論のあとには上がるという現象がありました。風評で株価はこんなに変動するのだ、とびっくりしました。だから株は怖いね。

ここで、面白いアニメ作品を紹介したいのですか、ちょっと、時間をいただいてもいいでしょうか。

—— さて、何でしょうか。

橘氏　これがまた、丸山ワクチンの立場とそっくりなのです。パロディですよね。「丸山ワクチン」の進捗状況が、一番分かりやすいと思いますので・・・。

アニメ「攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX.」

橘氏　皆さん、「攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX.」というアニメをご存知でしょうか。

士郎正宗原作のSF・テレビアニメなのですが、2002年にスカパーで放送されるやいなや大人気となり、日テレ系列の各局でもとりあげ、弊社でも放送したんです。

その中に架空の薬品として村井ワクチンというのが重要な役目をもって登場するんですが、そのシナリオは、丸山ワクチンをモデルにしているのです。

第2話の「暴走の証明 TESTATION」が「平成 14 年度文化庁メディア芸術アニメーション優秀賞」を、そして、シリーズ全体が「東京国際アニメフェア2003 公募・アニメ作品部門優秀作品賞」を、それぞれ受賞するという優れものアニメなのですね。DVD/ビデオの出荷本数も150万枚/本以上に及んだのです。

あらすじをお話ししますと。
電脳化が一般化され情報ネットワークが高度化する西暦2030年。複雑化する犯罪に対抗するため、内務省に直属の独立防諜部隊として「公安9課」、通称「攻殻機動隊」という

のが設立されるのです。サイバー犯罪の捜査やテロリズムの抑止・検挙、要人警察、汚職摘発など、極秘裏な任務なのですが、遂行していくうちに、ある一つの問題に浮かびあがってくるんです。

それは「電脳硬化症」といって、電脳化を施した者なら誰でも罹患の可能性がある原因不明の病で、発症すると電脳化を施した部分が徐々に硬化していき、最終的には脳死に至るという恐ろしい不治の病なのです。その進行を抑制する薬としてマイクロマシン療法というのが先行していたのですが、そこに「村井ワクチン」が登場して一気に話が面白くなってゆくんです。

「村井ワクチン」は医学博士の村井千歳により、サルの結核菌抗体から偶然発見された抗腫瘍抑制剤。マイクロマシン療法などによる電脳硬化症の治療は当時開発途上で、その効果は不明であったにも拘らず国に認可され、実利をあげていたんですね。そのため、マイクロマシン療法を否定されては困る者たちや、村井博士の功績に嫉妬する医師などの陰謀により、村井ワクチンは国からの認可が見送られてしまったんです。

しかし、その効果は確かなものであり、2021年4月に、表向きの発表はなかったんですが、すでに特定指定者有償実験薬として認可されており、有名人や権力者たちが秘密裏に接種していた事実が次々と明らかになってくるのです。この事柄については、厚生労働省が所持していた「村井ワクチン接種者リスト」に記載されており、ワクチンを不認可にした張本人である今来栖尚本人もワクチンを接種していたことが、第20話「消された薬 / RE-VIEW」で明らかになるのです。「村井ワクチン」にまつわる厚生労働省のスキャンダルは、この作品の主要な題材である「笑い男事件」の背景になっているのです。主に作品中の第20話「消された薬」と第21話「置き去りの軌跡」で語られる「村井ワクチン」を巡るエピソードは、昭和 40～50 年代に、ガンの特効薬として注目を集めた丸山ワクチンの進捗状況とぴったり一致するパロディであり、人名と年代を置き換えれば「丸山ワクチン」そのものなのです。

全日本有線放送大賞はイレブンがスタートだった！

―― ところで、夜のレコード大賞というのがありましたね。あれはどうなったのですか？

橘氏　“夜のレコード大賞”は1968年（S43）に「11PM」で始まりました。後に独立して「木曜スペシャル」枠で「全日本有線放送大賞」と改称して、関西で開催される唯一の歌謡グランプリとして、伝統と実力を築き上げ、各方面に大きな影響をもたらしてきました。

十円玉を投じて、自分の好きな曲をリクエストして、その一年間に最も愛され親しまれた曲を歌った歌手を表彰する、という日本の歌謡ファンの熱意をあくまでも尊重したのが、この賞の精神なのです。ふつう、歌謡祭は「ヒト」が審査しますが、グランプリ及び銀賞最優秀と新人賞に限っては、毎週公表される電話リクエスト回数の集計で決定されるため、不正票がはいりこむ余地がないため、レコード業界や歌手たちにとって、わずらわしい審査員工作の必要なく、信頼され、支持されてきました。そして、つねに音楽業界の目線を釘づけにして、他局の追随をも許さず、読売テレビの評価を高めてきました。

常に大衆の指向に呼応し、数々のヒット曲を供給したことは、まさに歌謡界の歴史でもあり、また、「音楽祭」番組として、全国でこうした独走体制を維持してこれたのも「有線放送」という大衆に支えられた格好の媒体との「出会い」があり、がっちりとスクラムを組んできたからです。

“夜のレコード大賞”をスタートさせる前、私は、11PM「夜はまかせろ！」（S42・2・16

放送）の取材で、夜の珍しい商売を集めていました。その1つが「有線放送」だったのです。その時、大阪を中心として放送所を7か所まで広げていた将来を期待される会社でした。社長の弟、宇野元義さんと音楽の話に花が咲き、他局に「レコード大賞」がスタートしたので、イレブンで「夜のレコード大賞」を作ろうとなったのです。その時、放送所の数がちょうど「イレブン」に増えていたので、大いに盛り上がっていました。ちなみに第一回の出演歌手は森進一、千昌夫、青江三奈、黒沢明とロスプリモス、ピンキーとキラーズ、矢吹建で、金賞は森進一、新人賞が矢吹建で、審査委員長は楠本健吉さんでした。そして「夜のレコード大賞」は日本中で2番目に古い音楽祭となったのです。

『全日本有線放送大賞』に改称した後も、「11PM」で新人賞ノミネートの番組や当日放送後に祝賀会が藤本義一さんの司会で放送されました。また、司会で長年親しまれた浜村純も、1991年の第24回で降板。翌年、読売テレビ30周年記念番組として、「ゆうせん20年史」を、大阪城ホールから歌謡ショー形式で生放送、過去の受賞者が受賞曲を披露したのを最後に、開始当初から続いた読売テレビ放送枠は終了しました。その後、1997年以降は堺正明が担当。そして、2001年と2002年は『ALL　JAPANリクエストアワード』へ、2003年以降は『ベストヒット歌謡祭』へ継承されていきました。

秘湯の旅と、うさぎちゃん

―― 温泉が必ず出てきましたよね。お嬢ちゃん2人が出てきてですね、この温泉の効能は、と何だかたどたどしくしゃべるのがいかにも素人っぽくて印象的だったんです。これはどなたのアイデアだったんですか。

橘氏　ああ、「秘湯の旅」と、うさぎちゃん。

―― うさぎちゃんですね、思い出しました。

橘氏 「イレブン」は終始「裏文化」を追及していましたから、人がめったに行かないところとか、連絡も取れないところを探して取材してました。それで「秘境の温泉」というのを時々やっていたのです。秘境ですから電話もなく取材の依頼もできない。村役場から連絡をとってもらったり、それもダメなら手紙を出すしかない。どうしても取材したくてアポなしでいって、断られたということもありましたね。現代社会から取り残された地の果てとか、私は好きでしたね。そういう場所や人、素材を選んで行くわけですよ。「終着駅」なんて哀愁が漂い大好きで、何回も取材しましたね。人もいい、自然もある。もう都会では忘れ去られたものとの出会いがたまらなくてね。それがなかなか評判が良くて、週刊誌などからも問い合わせが多かったですよ。そんなことで「秘湯の旅」シリーズが始まったのです。

「秘湯の旅」というタイトルは、シリーズになる前は「秘境の温泉・・・・・の旅」だったのですが、これじゃ長くなるし「秘境の湯」を「秘湯」と略したのです。これは造語で、どんな辞書にもこの用語は載ってなかったんですよね。「秘湯の旅」は長く続きましたから「秘湯」はもう常用語になっていて、辞書には載っていない用語だとは、誰もが思っていなかったのですね。ある時、藤本さんが、タッチン！国語大辞典に「秘湯」載ったで、と教えてくれたのです。以来、「秘湯」を乗せていない辞書は稀有となりました。

ただ困ったことに「秘湯の旅」を放送しますと、いくつかの温泉には好きものの温泉客が押し寄せ秘湯が秘湯でなくなってゆくのですね。これには心痛めましたが、何時かはそうなるんだからと自分にいいきかせていました。秘湯も紹介しつくしてきた段階で、もうやめようか

と思ったのですが、タイトルはそのままで「名湯」に巡りに切り替え、そのまま続けることにしました。そして有馬温泉はもとより全国の名泉と云われるところはすべて周り尽くしましたね。以後、「11PM・秘湯の旅」と題して、写真満載の豪華本が3冊も出版されました。

２人のうさぎちゃんですが、人物なしの風呂だけ撮影しても殺風景なので、ただ女性に入ってもらうだけではつまらない。おなじなら、素人で、若くて、清潔で、まだ恥じらいを残している娘さんに脱いでもらって、湯に浸かりながら効能や泉質を喋らそうということにしたのです。
ところが短いセリフがなかなか言えない。NGばかりで、のぼせてしまって続行不可能になってしまった。少し休ませている間に、スタッフがその場にあった案内用の看板に、特徴を書き持たせたのが始まりなのです。当時、日本では風俗産業が巨大化し性のモラルが乱れていました。そんなとき、うさぎちゃんの何とも言えない初々しさに、世の男性たちはこの上ない新鮮さ感じていたのかもしれません。

―― なぜ、うさぎちゃんと言うのでしょうか。

なぜ、うさぎちゃんかというと、湯船の中で移動するのに立ちあがると、上半身がまるみえになってしまうでしょう。まだ、スッポンポンですからね。そこで立ち上がらずに移動するには跳ぶしかなかった。で、ピョンピョンと跳んでいたから、「うさぎちゃん」と呼ぶようになったのです。

―― なるほど、それで・・！「イレブン」秘話ですね、これは。

橘氏　そう。このシリーズは人気がありましたから、長く続きましたね。廻りつくして、同じ温泉を再び巡ったこともありますね。2度目でも素材はまだまだ残っていましたから、大丈夫でしたね。人気が出ると、各温泉地から取材の申し込みが殺到してきました。レギュラーコーナーの強みですね。買い手と売り手が逆転してくるのです。だから、仕込みは楽でしたね。このシリーズは名古屋にある「コックスプロダクション」という制作会社に取材を依頼していたのですが、このシリーズを名刺代りに仕事先を拡げて行き、東京にも支店を出すほどに成長しましたね。地元名古屋に、テレビ局に先駆けてデジタルのスタジオを作くったり、ヘリコプターを購入したり、一時は大暴れしていました。ある時、そのヘリコプターに乗って取材中にそのまま海に落ちてしまったのです。ヘリが海の底に着くのを待って、プロペラが止まったのを確認してから脱出したという、沈着冷静な奴でしたが、責任感が強く、翌日にはまた別のヘリにのって取材を続けた、という豪傑な奴でもありました。

イレブンは見せ方次第！　演出の師匠は大道芸

―― 11pMの特別な演出方法って、決まっていたのですか。

橘氏　イレブンは夜遅く始まりますから、サラリーマンは帰宅すると、仕事で疲れきっているし、朝は早く起きないといけないしで、番組が面白ければ最後まで見てしまうが、そうなければ途中で切り上げてすぐ寝てしまう。だから通常の番組のように、徐々に内容を盛り上げていって、最後に決め打ちする、という本来の構成方法が通じないのです。面白い素材が満載の時は、なにから出していってもいいのですが、毎回そう、うまく素材が集まるとは限らないので、その場合には面白い素材から順に出してゆくのです。しかし、この方法も続くと視聴者に見抜かれてしまう。そこで、「初め良かって、中ぱっぱ、最後はきめて、出来あがり」を基準にして、これに素材が満たないものは放送を見送るとしていました。演出方法は各ディレクターによって違いますが、この枠立てで内容を組み立てれば、個性が損なわれ

るということはありません。私のよく使う手は「ヘビかましの術」といいまして、祭りの大道芸でよく見る物売りの手法、ガマの油売りのような進行方法です。
「さぁ～て、お立ち会い！･･･ここに取いだしましたのは、一本の手拭いであります･･」と手拭いをくるくるとねじって、どくろ状に巻きあげて、ヘビのように仕立て、この蛇が動き出す、とまず、かまします･･さあて、いつ動き出すか？･･さあ、そろそろ、･･と口上をまくしたて途中何回もへびに念力入れてゆく、その口上が実にすばらしく、そのうち本当にヘビが動き出すのではないかと思わせてくる。そして最後にガマの油を買わせてしまう。まずアタマでぶちかまし、徐々に引き込んでゆき、抜き差しできないようにして最後に決める。「11PM」には一番似合う演出法なのです。もし途中で口上の緊張の糸が切れたら目的は達成されないので、客を引きこもうと必死になります。テレビの演出も一緒なのです

―― ずっと期待を持たせて。

橘氏　そう、期待を持たせて最後まで見てもらうという、演出方法が生まれてきたんです。

　でも、性に関する素材の演出に関しては、約束事の枠内で表現しなくてはなりません。法律がありますから、注意しなければなりません。逆にいえば、法律さえ守ればいいのです。「11PM」というのは、タブーに挑戦し続けた25年というキャリアがありますので、その方法をいくつか、ご紹介しましょう。

法律との戦い、当局に何回も呼び出されております。中には、そこまでやるか、というディレクターもいました。ソープランドなど取り上げるものですから「エロブン」とか、エログロナンセンスとか呼ばれましたが、決して、取材違反をしたわけではありません。どうして法律に触れないように、うまく逃れられたのか、お教えいたしましょう。

ソープランドの演出を例にとりますと、裸になった男女が密着して身体を洗いあってるシーンがあるとします。このシーンを直接撮って、放送すれば法律にふれます。しかし、待合室で順番待ちをしている間に、洗ってもらっている自分の姿を想像している場面として見せれば、法律にはふれないのです。不思議ですよね、同じことをみせているのに、演出次第で善悪が決まるんですよ。法律というものは、そういうものなのです。注意してくださいね。日常生活の中で、このようなことが、よく起こっています。

イレブンの初期のころ、ブラウン管に乳首を出した女性を写したとします。そのディレクターは左遷されました。日活ポルノに出ていた水城リサさんという女優さんが裸の全身をバスタオルで巻いて演技をしていた時、タオルが外れて落ちてしまった。慌てて拾って隠したのですが、生放送なので、その間の様子が一部始終、露出されてしまった。それだけで翌日のスポーツ紙は大騒ぎだったのです。もう時効なので云いますが、実は誰かさんの演出だったのです。今では胸が見えたからと云って目くじら立てる人もいませんが、イレブンはそのような歴史の中で性の表現を拡げてきたのです。

もう一件お話しましょう。
日活映画の山本晋也監督に直接伝授された手法があります。
「下宿屋シリーズ」で、二階に住んでいたストリッパーの「下の毛」が堂々と映っていた。映画の場合、映倫という規制があって、「下の毛」が写すことは固く禁じていた。監督に聞いてみたら、ストーリー上では、彼女はパイパン（無毛）という設定になっており、外出の前には人工の毛を張り付けていたのですって。「生」はダメだが、「人工」ならいい。でも、張り付けた後のシーンは、すべて「実毛」だったのです。法律を逆手にとったのですね。深い話ですね。

タブーに挑戦して 25 年

皆さん、幼い頃に出かけたお祭りの大道芸の様子を思い浮かべてください。客が取り巻く輪の中で、あなたはそれを、もう何回も見ていました。子供心に、その仕掛けが不思議でなりませんでした。

そして次の回、今度こそ、その正体を捉まえようと、あなたは裏側へ回ろうと試みます。でも、どこからともなく、強面のおじさんが現れ、一括されてしまいました。それでも・・・。そしてついに、あなたはその謎を覗き見たのです。その瞬間の異常なほどの胸の高鳴り。懐かしい思い出ではありませんか。つまり、この「強面のおじさん」が権力、弾圧であり、一括されてもなお、「裏へまわろうとする子供」が「11PM」なのです。

性風俗の現状を当時、その都度「11PM」はつぶさに捕らえ、意識と行動の両サイドから一つの風俗として紹介し、積極的に分析してきました。本音を吐けば、それは、また権力からの大変な弾圧の歴史でもあったのです。

私は、入社当初に「日本の文学」を担当していましたから、その時の知識によりますと、江戸時代は享保のころ、心中が大ブームになり、近松門左衛門の「近松心中」などが当時の世相を見事にとらえております。自由への抑圧が必然的にエロスの閉塞状態にいきつき、「男と女」たちが性の極北に死しか見いだせなくなってしまったのです。

この"心中ブーム"に対して、時の権力者は大弾圧を加えました。まさか恋する男と女を片端から予防検束するわけにもいかず、弾圧の重点は、主として"みせしめ"におかれたのです。

そして、大阪の奉行所は、心中した男女については、両人を全裸にしたうえ、お墓に放り出しておくよう指示したのです。これは端的にいいますと、「性器」への見せしめであって、好奇心にかられて見物に集まった群衆の目も、おのずと、死んだ男女の「性器」に集中しました。「今日の女は毛が濃かった」とか、「あんな逸物をもっていて、死ぬなんてもったいない」とか、ひそひそ語り合っていたのです。それにしても、江戸時代の心中に対する奉行所のやり方はあまりにも露骨であり、権力の側の性に対する深層心理が透けて見えるではありませんか。

心中などはどう考えても当事者の自由意志的行為であります。「性器」が何か格別のもののように扱われ、自由な性への弾圧が「みせしめ」中心に行われ、その上それを「わいせつ」に仕立て上げてしまうなんて、もってのほかです。これらを分析してみますと個人の主観を全く無視した権力者の野蛮は、昔も今も全く変わっていないようで、驚かされてしまいます。

つまり、人の考えや倫理観というものは、その時代、時代の常識によって決まるものであり、何が正しく、何がそうではないのか、浅はかな人間の知恵では誰も決められるものではありません。大切なのは、今この世にあるものはすべて許されて存在する、という"事実"なのでございます。「11」で時を止めたのはそのためなのです。一つの基準で、その時の常識で、正しく物事を判断しようとする、それが「11PM」の姿勢なのです。裏を返せば、時の流れにあわせて、いかに常識の線を変えてゆくか。それが「11PM」の挑戦でもあったのです。

そして、「11PM」が始まって20数年が過ぎようとした頃、世はまさに情報時代へ突入していました。情報がありあまって、それを選択する時代、どちらかといいますと、いい時代だと思われていました。しかし一番こわいのは、逆に情報は人を支配したがるもので、また始末が悪いのです。説得力のない情報は、決して情報にはなりません。

前にもいいましたが、「裏」は必ず次の瞬間「表」になると繰り返しました。「11PM」が成り立ってきたのは裏文化の追求、つまり裏返しの精神でした。情報過多になってくると、裏はすでに、裏でなくなり、そして「表と裏」のバランスは完全に崩れ去ってしまいました。つまり、情報化時代の情報は無限に重複するか、また皆無かのどちらかではないでしょうか。この“表裏の法則”の見極めを誤れば、番組は不安定になり、バランスを保つことが非常に難しくなってくるのです。これはまことに危険極まりないことです。そして「ワースト番組」からはずされてしまったのです。

生きた風俗の情報を最前線として、“人間とは何か”“生きるとは何か”を問題提起し続けて25年。ここに「11PM」は潔くその使命を全うし、航海の全日程を終えることにしたのです。時に1990年3月29日のことでした。

宇宙の円環の律動によって、「時」はふたたび廻りきます。そして、新たに回生し、すべては「過去」となって消えゆき、二度と往きて還ることはございません。
皆さんはまた、そうした「過去」へではなく、まだ見ぬ「未来」をまえに、どのように生きてゆくかということに、常に、つきない興味と関心を抱き続けているはずです。
その何か、すばらしいことやさまざまな遭遇へ向かってゆく期待に、だれもがゾクッとするのはそのためではないでしょうか。

作家の井上ひさしさんが『ブラウン管の四季』の中で、このようなことを云っています。
最良のテレビ番組は、「11PM」である。そこには、知恵があり、熱気があり、一生懸命テーマを出そうとする気概がある。これが面白くなくて、なんであろう。これまでのテレビはタテマエばかり、「11PM」 はホンネを云っている。放送は、こうでなきゃいけない。寺山修司、唐十郎、大島渚とフーテンがからむ、といった具合、次から次と価値が揺さぶられるような時代だった。今は、「少年ジャンプ」と「11PM」を見ていれば世の中の流れが分かる。と。

ジャズ好きのタクシー運転手から思わぬところで謝意

―― 橘さんが前におっしゃられていた、自分が作りたいものを作ってきた。
これはどういう意味ですか。

橘氏　作らされているのではなく、作りたいテーマを自分自身で選び、そのテーマを追求するために素材や出演者を決めていた、ということなのです。特定の個人を追いかけるドキュメンタリーは別として、ほとんどの場合は出演者ありきではなく、テーマが先行していたことです。また、もちろん私利私欲のためでもありません。それで、こんな出来事があったので、ちょっと、ご紹介したいと思います。それは実に嬉しいことなんですが・・・・。

家族で観劇にいったときに、大阪駅から、タクシーに乗ったのです。車内で、私の好きな懐かしい「ジャズ」がガンガンかかっていいました。普通、かかっていたら、野球中継か、歌謡曲かなにか大衆的なものが多いですよね。
そこで・・・ 「へえ…運転手さん、ジャズが好きなんだね。私もこの手のジャズが好きなんですよ」と運転手さんに声をかけたら。「僕はねぇ、いままで、ジャズ一辺倒できました。テレビ

に出たこともあるんですよお！」と。「へえ、どんなテレビに出たの」と重ねると、運転手さん「むかし『11PM』に出たことあるんです・・」と自慢げにいうのです。私「へえ、そうなんですか」、運転手さん「いやあ、その時のプロデューサーが橘さんといいましてね。もの凄くお世話になりました～感謝しているんです。なつかしいなぁ～！」それを横で、きいていた娘が「お父さん、お父さんのこと云ってるのとちがうの」って、それで、娘が「それは、いま横に座っている父です～！」って言うてね・・・・。目的地に着くと、運転手さんは「料金はいただけません」と言うし、こっちは「いや、お釣りは要りません」というようなことがあったのです。でも、私の記憶の中には、もう忘れ去ってしまって残っていなかったのです。

私はそのバンドを売り出してやろうとか、儲けさせてやろうとか、という目的で出演してもらった訳ではなく、自分が立てたテーマを追及するためには、そのバンドが必要だったため出演してもらっただけかもしれない。その後、どうなったか、ほとんどの場合分からないのです。しかし、それがきっかけでバンドの人気が出たとか、儲かったとか、といういろいろな付録が付いてくる場合が多々あるのです。そのプラス効果が高ければ高かいほど、感謝の度合いも高くなってくるのです。そういう例はバンドでなくても、他にたくさんあるんですよね。「11PM」には、いろいろな職業の方に出演してもらっていますから、出演者すべてを覚えているわけではないんです。同じように、「イレブン」に出演した者同士が一緒に事業を始めて成功したケースになると、「11PM」の記憶は永遠と残ってゆくのですね。そんな例は分かっただけでも何件かありました。ロビーで話こんでいるうちに、自分に欠ける知識相手が持っていた。気が合ったのでしょうね。私たちスタッフが知らないところで、「イレブン」に感謝している人が沢山いる、ということなのです。そういうとき仕事冥利に尽きますよね。

いま、ニュースのコメンテーターやっている岩田公雄くん。彼が記者時代に、大阪・茨木市の住友銀行で3億円を着服した女性銀行員が、香港へ逃亡したという事件がありました。各マスコミが、取材班を組み、すぐさま香港まで追いかけた。その中に後輩の岩田記者もいたのです。現地から私に電話が入ってきて「橘さんのお蔭でスクープができました。ありかとうございます」って言うから、「へえ、それは良かった」となったので・す・が・・・。私には訳が分からない出来事だったので、岩田君にその顛末を聞いてみると、「俺は「11PM」をやっていた橘くんにすごい恩義がある〇〇というものだ。だから、その借りを、同じ読売テレビであるお前に、今返す。橘君にそう伝えてくれ」そして、秘密のコードを教えてくれ、スクープに繋がった、ということだったのです。これって、まるで極道の世界ですよね。多分、そのとき、その人は裏社会に生きていたのでしょう、名前を云われても私は思い出せなかった。その人と何時、何をしたのか、記憶にさえなかったのです。だから自分が普段何気なくしている行為が、自分が思ってもいない人間関係を生み、それが独り歩きしてゆくという怖さをかんじましたですね。これは本当に、凄い勉強になりましたね。それを自覚し、道に外れたことは決してやってはいけない、と心がけています。

—— タクシーの運転手さんも幸せにしましたし、それから、岩田くんも幸せにしましたよね。

テレビは 10 年経ってもなくならない

—— ところで、この会でお話いただくほとんどの方は、テレビを見ていないとおっしゃるんですが、橘さんはどうなんですか？

橘氏　テレビね、僕は観ていますね。テレビはなくならないと思います。やっぱり、なんだかんだ言っても、いつも点けていると何らかの情報は入っているのです。観てないようでみているのですよ。いわゆる、「ながら族」というやつですね。突然の事件が起こると、その時、自分がやっていることを中断してでも、観るじゃないですか。そんな媒体ってテレビ以外にはな

いのじゃ、ないですか。うちの孫娘なんか、テレビからドンドン情報をとっています。もちろん番組は選んでいますがね。言葉も覚えていきますよ。パソコンとか、ipodとかをやりながら、食卓を囲めますか。他にもいろいろとありますが、自然に頭に入ってくる宣伝媒体としては、テレビはやっぱり一番です。テレビはもう20年前からダメだと言われているのです。だけどまだ健在ですね。だからあと10年経っても多分同じじゃないですか。僕はそう思います。
しかし、・・・・。
テレビが始まって、もう何十年とたちますが、進歩したのはハード面ばかり。デジタルのお蔭で、カメラでは捉えられない画像を作り出すことが可能になりました。映像も格段に美しくなりました。でも、演出は進歩したかい！番組の企画は進歩したかい！どちらも昔の方がよかったんじゃないかい！ハード面をいかした映像は他のメディアに任せて、テレビでしか、なしえない武器を最大限利用して生き残ろうではありませんか。それは「生」（なま）をいかした臨場感だ、と思いますよ。

—— なるほど、「生番組」が生きる道ですね。わかります。ところで見ていらっしゃる番組はどんな番組ですか。

橘氏 沢山ありますよ。情報の宝庫ですから。NHK の「プロフェッショナル・仕事の流儀」9時からの「NHKスペシャル」「趣味DO楽」「先人たちの底力・知恵泉」「100分de名書」「地球イチバン」に「地球ドキュメント」、テレビ大阪の「ソロモン流」「未来世紀ジパング」「ガイアの夜明け」「カンブリア宮殿」、主にドキュメンタリーですかね。ドラマも観ていますよ。「軍師・官兵衛」「銀二貫」「MOZU」や「ロング・グッバイ」や趣味に合うのを各局から選んでみます。スポーツは全般ですが、サッカーはJリーグの選手の名前が分からないので、日本の代表チームが戦う国際戦しか観ません。息子がやっていたラグビーの方が好きです。学生時代にアイスホッケーをやっていましたので格闘技系がいいですね。

—— やっぱりちょっと堅めの番組が多いんですか。バラエティショーなんてご覧にならないですね。

橘氏 観ないことはないですが、少ないですね。でも、家族が集まってテーブルを囲んでいる時は、バラエティー番組をかけているかな。「鶴瓶の家族に乾杯！」とか「Aスタジオ」とかはいいですよね。「ケンミンショー」など、情報提供をしているバラエティー番組は見ていますよ。

—— 今までこの会に出席された方の中では一番見ていらっしゃるかなと思います。BSはどうですか？

橘氏 BSはビルの構造上、ちょっと不具合がありましてね、映らないのですよ。でもね、映ったとしても量的にどうかな。オーバーフローとしますね。今だけでも、観たい番組が重さなったり、外出して観られない時は録画するのですが、それを消化するだけで精いっぱいなのです。予告編で凄く見たいBSの番組紹介があると、観たくなるのですが、もし見ることが出来たとしても多分パンク状態になるのと違うかな。

—— 結論めいたお話で、テレビはなくならないということをはっきりと言っていただきましたが、この辺りで残り25分ばかりとなりました。進行役としてのお話は一応終わらせて頂きます。あとは皆様方も色々な疑問・質問がおありだと思います。どなたからでも結構ですので、ご発言をいただきますようお願い致します。

—— 東京の「11PM」の話ですが、大橋巨泉さんが賞をもらったとき、僕もたまたま同じ賞をもらい

ました。大橋さんがあいさつされて、要するに大橋さんが賞を取られたのは「11PM」で沖縄問題を扱っておられて、そのことについての賞だった。巨泉さんがあいさつで、「報道番組で沖縄を扱うのは当たり前の話。だけど『11PM』という、言ってみれば『裏』の番組で『沖縄』（のテーマ）で賞をもらったということはすごくうれしいし、そのことにすごく意味があるんだと思う」というあいさつをされたんです。随分感心したことがあるんですけどね。そういう東京の「イレブン」が沖縄を扱ったような形で、大阪の「イレブン」もそういうものを扱われたことはありましたか。

橘氏　私も復帰前と復帰後の沖縄を黒田征太郎（イラストレーター）と一緒に取材したことがありますが、前にも申しました通り「11PM」がテーマとする「裏文化」を縦糸にして取材することは忘れていません。ただ私の場合は巨泉さんのように大鉈を振るって正面から立ち向かうタイプではなく、ゆっくりと横や、後ろからつつきながら、最後に正面に廻り込むタイプなので、表現方法が全く違いますが、目的は同じだとおもいます。すべて映像で説明しながら、あまり語らず、観る人に感じてもらうというやり方なのです。だから取材では、撮りたいものはどんな手段を講じても映像に収めるまで粘ります。テレビはラジオと違って、映像という武器を持っている訳ですから、同じテーマをとりあげても、表現方法は全く違うのです。だから、その武器を最大限つかって映像で伝えるべきなのです。私の場合、時として詠嘆調なナレーションを被せる場合がありますが、それはBG効果として使っているだけで、説明ではないのです。ほんとうは、説明ナレーションを一切使わない映像だけでの番組が理想なのですが、そうすると、日本語の分からない人たちにも観てもらうことも出来ますからね。実は「三味線の詩」をアメリカの芸術祭に参加したい、と密かに思っていましたので、意識して楽曲と映像を中心にして組み立てましたから、一歩その方向に近づけたかな、と思っています。

――　そういう社会問題というか時事問題というか、そういうものにもかなり目を向けておられたということですか。「11PM」を作られるにあたって・・・。

橘氏　社会問題に目を向けていたかどうか・・ですか？それは、向けていましたが、真正面からを向き合いませんでした。なにも、夜のワイドショーで、しかも、くつろいでいる時に、ニュースでやっているテーマを、繰り返すこともないですからね。やるときは、ちょっとズラした形でやりましたね。たとえば風俗や、社会の底辺を生きる人を取材しながら、その裏に社会問題や時事的な問題をしのばせ、見え隠れさせてゆきましたね。

前に、越後瞽女の説明をした時に、「ストリッパーの花子さん」の話をしましたが、ひとは、この世に「生」を与えられた限り、生きなければなりません。現実の前には、生きるための“建前”や“常識”など、一切、通用しませんでした。人には、すべて、「生きる」権利があり、義務があります。カメラはその人たちの本当の姿を追うだけで、その裏に政治や権力の歪みが浮かび上がってくるのです。私はイレブンの取材を通して、いろんな人生のパターンを裏側から見つめてきました。その歴史は、また、私自身の人生観をも変えようとする「生」に対する“いろは”を教えたものでした。分かっていただけるでしょうか。

また、簡単なやり方として、いろんな職業の人たちをスタジオに集めて、その時の社会問題や時事問題を本音でトークをしてもらう方法もよく取りました。また「正」と「負」とをスタジオでひき合わせて、対決させる、ということもよくやりました。主婦連と性風俗業者とか、教師と暴走族とか、でも、この方法は、生放送ですから時間内に結論に至らず、中途半端に終わる可能性もありました。大概の場合、激論となり、激しくぶつかり合い、ときには立ちあがって殴り合いになるようなケースもしばしばありました。それはそれで、視聴者はそのプロセスを楽しんでいたのかもしれません。視聴率も急上昇していましたから。

—— 結論がでないような場合はどうするのですか？

橘氏　時間的に延長戦は出来ませんので、日を改めて2回戦をやりました。視聴者もそれを期待していましたし、視聴率が取れることも、分かっていましたしネ。

また、海外取材はイレブンの大きな特徴の一つですが、例えばアメリカへ風俗の取材にいちど行くとアメリカで人間関係ができあがるので、そこからまた情報が入ってきて、自分で探さなくても情報が手元にたまってきます。それで2回、3回と続いていくものだから自然とその分野で専門化してくる。僕はアメリカでしたけど、ドイツが専門とか、イタリヤが専門とか、みんな得意先が出てくるのです。自分が探したネタをよりも、入って来る情報の方が「生きて」いるから凄味もあるのです。しかも「裏」も「表」も入って来るから、選択さえ間違えなければ永遠と続いていくのです。「イレブン」のテーマが途絶えることなく、25年も長続きしたというのは、そういったことがあるのではないかなと思いますね。

ここで重要なことは、生放送の最終的伝達者は、あくまでも藤本さんであるということです。いくらディレクターが主張したい目的があっても、藤本さんがそう思っていなかったら、その方向にテーマをうまく導くことが出来ません。だから、藤本さんと、事前に選んだ「テーマ」を綿密に打ち合わせをして納得の上で取材もし、本番に臨んでいました。藤本さんは博学ですから、そういう段階で、必ず自分が考えていた以上の、アイデアが出てくるという場合が多いのです。「三味線の詩」がいい例です。また少々取材に失敗しても藤本さんがマイナス面を補ってくれるので番組が救われるのです。またやりすぎると藤本さんの考査の中でろ過されて、羽目を外さないで済むのです。でも基本的には藤本さんもハードな面を持っており、そういった情報を持ち込んでくれることはありました。逆に、同行した取材の素材が藤本さんの小説に取り入れられたということも多々ありましたよ・・・。

—— 末次摂子さんは8人のディレクターの中には入っておられたのですか。偉い方だったのですか。

橘氏　末次さんは、ご意見番ですかネ。総合プルデューサーです。もともと新聞界の三女傑と云われた人ですから、僕らが入ったときには、末次さんの大きな目でにらまれたら、もう身動きできない、という雲の上の人でした。厳しかったけど、やさしい・・分かっていただけます。息子さんが僕の大学の後輩だということもあって、今もずっと可愛がっていただいておりますけどね。息子さんは電通に入って、大活躍なさっていますよ。それで電通に入社して間もないときに、彼がYTV担当になって、僕の番組にずっと付いて回ってくれました。半年？いや１年間くらいあったかな。因縁？のつながりを感じているのです。

—— 末次さん、今年初めて年賀状が来なかったんですけれども。

橘氏　ああ、そうですね…僕も貰ってないです。大丈夫なのかなあ・・？藤本義一さんからは、本人の名前で貰いましたけどね。もう亡くなっているのになあ？（奥さんの）統紀子さんの義一さんへの思いが、なんとなく伝わってきて胸がキューンとなりました。

—— いやいや、「11PM」の中には様々なものが含まれていたんだなぁという話が。単に温泉番組であるとか、「♪ダバダバ」だけではないというのが、様々出てきて面白いなあというお話になりました。あと残り時間少なくなりましたが、あと1人か2人。

橘氏　ちょっとね、日本テレビのスタッフから聞いた話ですが、「11PM」がなぜ11時スタートにな

ったか。当時、「木島則夫モーニングショー」が朝を開発して一人勝ちをしていました。民放は、時間を売って商売している訳だから、24時間の売り場面積のうち、人が寝ている時間を少しでも削って、さらに開拓していかなければならない。木島さんが朝を開発したのだから、ならば、夜を開発してやろう、なったそうです。それで、その日の夕刊と、次の日の朝刊の早刷り、それにアメリカへ電話すれば、時差の関係で、昨日、今日、明日の3つの出来事が捉えられる、ということになって「11時スタート」が決まった、というのです。生放送の武器を最大限生かそうということですネ。それにしても「木島則夫モーニングショー」の勢いは凄いものでしたからね

—— そうでしたね。一世を風靡しました。

橘氏　朝と夜の二大勢力が誕生したのですね。

—— 東京（NTV）と大阪（YTV）は、何か交流みたいなものはありましたか。

橘氏　ありましたが、私が初めて東京の会議に出た時は、発言しても問題にもされなかった。ええ、当時の日本とアメリカみたいな関係ですか。大阪は田舎やと思われていましたからね、「いまにみておけ！」と思っていました。対視聴者と云うよりも、東京に負けたくない、という執念で番組を作っていました。ところがYTVに徐々に実力が付いてくると、力関係が同等になってきて、最後には凄くいい関係になり、仲良くなりましたね。スタッフの中に当初から親切にしてくれる人もいて、江戸っ子弁なので分からなかったのですが、「ええやつやなぁ」と思っていたらやっぱり、関西出身でした。“終わったら飲み行こか”となって、あとはもう大阪弁です。やっぱり、関西出身の人間はどこか違うのです。肌に合いますね。

—— なるほどね。では再度お伺いしたいんですが、テーマ主義ということについて、後輩のディレクターに何か残されましたか、人材が育ってきたということはありましたか。

橘氏　人は人を見て育つと云います。私自身を振り返ってみても、つくづくそう思います。番組作りは職人の物作りに似ていて、手をとって教えるものではなく、先人の技術をまねたり、盗んだりして覚えていくものです。いってみれば、その経験を積み重ねて育ってゆくものなのです。だからイレブンという職場に身を置けるということは、幸せなことだと思わなければならないのです。ふつうの番組は、企画で決まった内容を繰り返すばかりで、いわば単純作業ですが、イレブンはそうじゃない。毎回、ゼロから自分でテーマを考え、取材をし、自分のやりたいように作り上げてゆくことが出来るのです。ドキュメンタリーにしてもよし、音楽番組にしてもいい。お笑い番組でも、ドラマ仕立てにすることも出来る。また、先輩が何人もそれぞれの個性を活かした番組をつくっている。それが自分の目の前に無数とあるのです。勉強にならない訳がありません。イレブンの後輩たちは、少なくとも、自分の感覚に合うやり方を見つけてどんどん成長してゆきました。

僕らが入社してから数年経って、1940年代はディレクター時代と言われたのですね。各局ともそうですが、当時、番組のプロデューサー名には部長とか上司の名前が出ていたのです。私はテレビ5期生でしたから、先輩たちは4年生まで。実際に番組を作り、仕切っているのは役職かディレクターのどちらかだったのです。だから、実際はディレクターがプロデューサー業務もやっていました。そんな時代に育ったのです。だから、ディレクターは何でもできたのです。それで人材がどんどん育って、ディレクター時代と云われました。その世代が、一堂に繰り上がると、今度はプロデューサー時代の到来と云われました。そのプロデューサーが卒業する時期になって、「あいつら、やれんのかいな」ともささやかれたのですが、やっぱりすごいやつが出てくるのですよね。能ある鷹は爪をかくすとでもいいまし

ょうか、やっぱり育っていたのです。“こんな、いい番組を作るかぁ”ってね。本当に“見たぞ”って電話しましたからネ。

―― でもやっぱり良い時代だったでしょうね。

橘氏 今から考えたらね。最高でした。

―― いつまでもテレビを愛して止まないと思われる橘さんのお話をお伺いしました。ちょうど時間になりました。ほかにご質問がなければ、このあたりでお開きとさせていただきたいと思いますがいかがですか。 どうもありがとうございました。

橘氏 しょうもない話を聞いていただきましてありがとうございます。

―― ありがとうございました。

【注】会が終わった後、橘氏に「高齢者とテレビ」についてご意見を伺ったところ
◎お年寄りが夢をもてるような番組を作るべきだ。
◎番組を進行する“顔出しする人”が如何に魅力的か、人選に力点をおく。
◎例えば、医学番組にしても、何でくくるかが大事、それでは具体的にどんな番組にするかという答えを出すのは難しい。

以上